

ルートヴィヒ・ベヒシュタイン編著

『ドイツ伝説集』試訳（その二）

鈴木 満 訳・注

*凡例

1. ルートヴィヒ・ベヒシュタイン編著『ドイツ伝説集』（一八五三）（略称をDSBとする）の訳・注である本稿の底本には次の版を使用。

Deutsches Sagenbuch von Ludwig Bechstein. Mit sechzehn Holzschnitten nach Zeichnungen von A. Ehrhardt. Leipzig, Verlag von Georg Wigand, 1853. ; Reprint. Nabu Press.

初版リプリント。ちなみに一〇〇〇篇の伝説を所収。

2. DSB所載伝説の番号・邦訳題名・原題は分載試訳それぞれの冒頭に記す。

3. ヤーコプとヴァイルヘルムのグリム兄弟編著『ドイツ伝説集』（略称をDSとする）を参照した場合、次の版を使用。

Deutsche Sagen herausgegeben von Brüdern Grimm. Zwei Bände in einem Band. München, Winkler Verlag, 1981.
Vollständige Ausgabe, nach dem Text der dritten Auflage von 1891.

ちなみに五八五篇の伝説を所収。

なお稀にはあるが、DSの英語訳である次の版(略称をGLとする)も参照した。

The German Legends of the Brothers Grimm. Vol.1/2. Edited and translated by Donald Ward. Institute for the Study of Human Issues, Philadelphia, 1981.

4. DSB所載伝説とDS所載伝説の対応関係については、分載試訳冒頭に記すDSBの番号・邦訳題名・原題の下に、ほぼ該当するDSの番号・原題を記す。ただし、DSB所載記事の僅かな部分がDS所載伝説に該当する場合は、ここには記さず、本文に注番号を附し、「DS***に詳しい」と注記するに留める。

5. 地名、人名の注は文脈理解を目的として記した。史実の地名、人名との食い違いが散見されるが、これらについては殊更言及しないことを基本とする。ただし、注でこれが明白になる分はいたしかたない。

6. 語られてゐる事項を、日本に生きる現代人が理解する一助となるかも知れない、と、訳者が判断した場合に、些細に亘り過ぎる弊があろうとも、あえて注に記した。こうした注記における訳者の誤謬へのご指摘、および、このことについても注記が必要、といったご高教を賜ることができれば、まことに幸いである。

7. 伝説タイトルのドイツ語綴りは原文のまま。

8. 本文および注における「」内は訳者の補足である。

*分載試訳 (その一) の伝説

- 一 ドイツの大河ラインの話 Vom deutschen Rheinstrom.
- 二 スイスの民の起源 Des Schweizervolkes Ursprung. *DS514 Auswanderung der Schweizer.
- 三 聖ガルス Sanct Gallus.
- 四 聖カレンの修道士たちが祈りを捧げて葡萄酒を授かる Die St. Galler Mönche erbeten Wein.
- 五 ダゴバートの徴 Dagoberts Zeichen. *DS439 Dagoberts Seele im Schiff. / *DS440 Dagobert und seine Hunde.
- 六 テル伝説 Die Tellensage. *DS298 Die drei Telle. / *DS515 Die Ochsen auf dem Acker zu Melchtal. / *DS516 Der Landvogt im Bad. / *DS517 Der Bund im Rütli. / *DS518 Wilhelm Tell.
- 七 ルツェルンのホルント殺害の夜 Luzerner Hörner und Mordnacht. *DS519 Der Knabe erzählt's dem Ofen. / *DS520 Der Luzerner Harschhörner.
- 八 ホーエンザクスの殿たち Die Herren von Hohensax.
- 九 イーダ・フォン・デア・トッゲンブルク Ida von der Toggenburg. *DS513 Idda von Toggenburg.
- 一〇 ピラトゥスと群れなす小人 Der Pilatus und die Herdmandli. *DS150 Die Füße der Zwerge.
- 一一 獣と魚を守る山の小人 Die Bergmandli schützen Heerden und Fische. *DS302 Der Gämjäger.
- 一二 群れなす小人の退去 Die Herdmandli ziehen weg. *DS148 Die Zwerge auf dem Baum. / *DS149 Die Zwerge auf dem Felsstein.
- 一三 テトルスト Der Dürst. *DS 172 Der wilde Jäger Hackelberg. / *DS270 Der Türst, das Posterli

und die Sträggele. / *DS312 Die Tut-Osel.

- 一四 有翼龍たちと無翼龍たちの話 Von Drachen und Lindwürmen. *DS217 Der Drache fährt aus.
 一五 ヴィンケルリープと無翼龍 Winkelried und der Lindwurm. *DS218 Winkelried und der Lindwurm. /
 *DS220 Das Drachenloch.

一六 カステレン高原牧場 Kastelen Alpe.

一七 お花の高原牧場 Blümleis Alpe. *DS93 Blümleisalp.

一八 マッターホルンに現れた永遠のメタヤ人 Der ewige Jude auf dem Matterhorn. *DS344 Der Ewige

Jude auf dem Matterhorn. / *DS345 Der Kessel mit Butter.

一九 巖壁の聖母 Mutter Gottes am Felsen. *DS348 Das Muttergottesbild am Felsen.

二〇 動物たちの樂園 Das Paradies der Thiere. *DS300 Die Zirbelnüsse. / *DS301 Das Paradies der

Tiere.

二一 悪魔の橋 Die Teufelsbrücke. *DS337 Die Teufelsbrücke.

二二 牡牛の小川 Der Stierenbach. *DS143 Der Stierenbach.

二三 より良き石 Der Besserstein.

二四 十字架山 Der Kreuzliberg. *DS340 Der Kreuzliberg.

二五 骰子が原 Die Würfelwiese.

二六 バーゼルの時の鐘 Die Basler Uhrglocke.

二七 アウグスト近郊なる異教徒の洞窟の蛇と女 Die Schlangenjüngfrau im Heidenloch bei August.

*DS13 Die Schlangenjungfrau.

二八 ベルンハルト公誓言を持つ Herzog Bernhard hält sein Wort.

二九 忠実なエックアルトの話 Vom treuen Eckart.

三〇 ツェーリンゲン家の起源 Der Zähringer Ursprung. *DS527 Ursprung der Zähringer.

三一 巨人の玩具 Das Riesenspielzeug. *DS17 Das Riesenspielzeug. / *DS325 Die Riesen zu Lichtenberg.

三二 墓蛙の椅子 Krötenstuhl. *DS223 Der Krötenstuhl.

三三 粉挽き小屋の熊 Der Mühlenbär.

三四 司教座聖堂王 Chorkönig.

三五 聖オットーリーア Sankt Otilia.

三六 父と息子 Vater und Sohn.

三七 大聖堂の時計 Die Münster-Uhr.

三八 シュートラースブルクの射撃祭とチューリッの粥 Straßburger Schießen und Zürcher Brei.

三九 ブレッテンの小犬 Das Hündchen von Bretten. *DS96 Das Hündlein von Bretta.

四〇 トリフェルス Trifels.

四一 カイザースラウテルンの赤髭 Der Rotbart zu Kaiserslautern. *DS296 Kaiser Friedrich zu

Kaiserslautern.

四二 舟に乗る修道士たち Die schiffenden Mönche. *DS276 Die überschiffenden Mönche.

四三 シュヴァーベン録 Die Schwabenschüssel.

- 四四 シュパイアーの弔鐘 Die Todtenglocken zu Speier.
- 四五 ヴォルムスのユダヤ人たち Die Juden in Worms.
- 四六 ダールベルク一族の語 Von den Dahlbergen.
- 四七 ヴォルムスの象徴 Wormser Wahrzeichen.
- 四八 ラインの王女 Die Königstochter vom Rhein.
- 四九 オッペンハイム近郊のスウエーデン柱 Schwedensäule bei Oppenheim.
- 五〇 ジーゲンハイム Siegenheim.
- 五一 イエツッテの丘と王の椅子 イェツツェ・ヒル・キョウノイシ Jetten-Bühel und Königsstuhl. *DS139 Der Jettenbühel zu Heidelberg.
- 五二 聖カタリーナの手袋 St. Katharinen's Handschuh. *DS170 Rodensteins Auszug.
- 五三 ローデンシュタインの進發 Des Rodensteiners Auszug. *DS170 Rodensteins Auszug.
- 五四 エーギンハルトとエム Eginhart und Emma. *DS457 Eginhart und Emma.
- 五五 ヴインデック一族 Die Windecker.
- 五六 ロルシュのタッシロ Thassilo in Lorsch.
- 五七 鬼火 ヘーアツァン Der Heerwisch. *DS277 Der Irrwisch.
- 五八 草地の乙女とくしやみ Die Wiesenjungfrau und das Nießen. *DS224 Die Wiesenjungfrau. /
- *DS225 Das Niesen im Wasser.
- 五九 沈んだ修道院 Das versunkene Kloster.
- 六〇 フランケンシュタインの無翼龍 フランクェンシュタイン Der Lindwurm auf Frankenstein. *DS219 Der Lindwurm am

*本分載試訳(その二)の伝説

- 六一 フランケンシュタインの驢馬扶持 ろばほふち Das Frankensteiner Eselslehen.
六二 黄金のメインツ Das goldne Mainz.
六三 ハットー、ヘーリガー、ウーリギス Hatto, Heriger und Willigis. *DS242 Der Binger Mäuseturm. /
*DS474 Das Rad im Mainzer Wappen.
六四 マインツの聖なる十字架 Die heiligen Kreuze zu Mainz.
六五 ハインリヒ・女人讚美の葬礼 フラウトローフ Heinrich Frauenlob's Begängniß.
六六 聖女ビルヒルデ Die heilige Bilihilde.
六七 フランク族の浴り場 フルト Der Franken Furt. *DS455 Erbauung Frankfurts.
六八 王の降誕祭 ヴァルタハイト Des Königs Wehnacht.
六九 エツシエンハイム塔の話 トクトル Vom Eschenheimer Thurm.
七〇 ファルケンシュタインの悪魔の道 トクトル Der Teufelsweg auf Falkenstein.
七一 エツプシュタイン一族 Die Eppsteiner.
七二 血の科の木 フールムレーンハルト Blutinde.
七三 神の難儀 ノットゴツアス Noth Gottes.
七四 レーダーベルク Räderberg. *DS279 Räderberg.
七五 囁きの声 ハルム Die Wisperstimme.
七六 燃える炭 Die glühenden Kohlen.

- 七七 死を告げる鳩 Taube zeigt den Tod an.
七八 トハウンの猿 Der Affe zu Dhau.
七九 坊さんの帽子 Das Pfaffenkappchen.
八〇 長靴一杯の葡萄酒 Der Stiefel voll Wein.
八一 荒れ狂う獅師 Der wilde Jäger.
八二 シュパンハイムの創設 Spanheims Gründung.
八三 モーゼル葡萄酒の起源の語 Vom Ursprung des Moselweins.
八四 聖人たちの墓 Der Heiligen Gräber.
八五 メッツは踊るのお断り Metz versagt den Tanz.
八六 ヴィルドウングの悪魔の盟約書 Der Teufelsbündner in Virdung. *DS536 Der Virdunger Bürger.
八七 貞女フロレンティーナ Die getreue Frau Florentina. *DS537 Der Mann im Phug.
八八 トリーアの齡 Trier's Alter.
八九 聖アルヌルフの指環 Sankt Arnulf's Ring.
九〇 天罰靦面 Frevel wird bestraft.

六一 フランケンシュタインの驢馬扶持

その昔、ダルムシュタットにはなんともひどいかみさん連中がいた。願わくは現今同地においてなのかもっとましなご婦人がたでありますように。その頃の女房たちと来たら亭主を棍棒でぶんなくったのである。巷間伝えられるところによれば、それはそれはこっぴどく、酷い遣り口だったので、女房とその打擲から身を防ぐため、亭主たちはフランケンシュタイン一族に矯正の手助けを求めた。ダルムシュタット市民は一族に毎年、十二マルターの穀物、金ではグルデン銀貨二枚とヘッセン・アルプス二枚を提供、これでもってフランケンシュタイン一族は一頭の驢馬を飼っていた。で、市からの要望があると、そのつど一族はこの驢馬を実直でがっしりした驢馬牽き一人を附けて送り出した。亭主をなぐった女房はこの驢馬に乗せられ、しかも町中引き回しという目に遭わされた。妻が夫つい手を上げてしまったとか、夫が病気で虚弱だとかいう場合は、この驢馬牽きが驢馬の手綱を執った。しかし、夫と妻の間に公然かつ正堂堂の闘いが起こり、夫が妻からひどくやつつけられた場合は、夫が大恥かきかき自分で驢馬を牽かなければならなかった。当時ダルムシュタットでは法と掟が極めて厳正に執行された。なにしろ同地には警察権を行使する市委員会があり、放埒無頼の連中から大いに恐れられていたのである。こうした輩はこの委員会を「癩な百」と呼んだ。百人の成員で構成されていたので。かつて悪妻たちのある集まり——今日だとクレンゼン⁽³⁾でも申すようなものか——が示し合わせて夫たちをしたたかになぐるといふ事件が起こった。そこで「癩な百」の男たちはフランケンシュタイン一族にこんな書簡を認めた。いわく「城扶持の法と掟に従い、かの驢馬およびその牽き手を我らの救援に差し向けていただきたい。我らは両者、すなわち牽き手と驢馬を迎えに市の使丁を遣わす所存。この者が両者のダルムシュタットへの入市を案内つかまつる。両者には充分食事と飼料をあてがわ

せる。そしてご一族がやむを得ず驢馬を必要とされる場合、両者は再び費用こちら持ちで送り返されるものといたす。傲岸不遜にして邪なる妻たちの暴力が抑圧され、これ以上蔓延せざるように」と。

そしてその後にもこうした処罰をさらに頻繁に行う必要があった。それからブフングシュタット、ニーダーラムシュタット、クルムシュタット、ゴッドラウなどなどのような近隣の他の市町村もやはりこの驢馬を必要とした。ベッスゲンだけはフランケンシュタインの騎士たちに驢馬扶持の穀物を払わぬこと百マルターにも及んだので、フランケンシュタインはもはや彼らには驢馬を貸さなくなり、女房連はベッスゲン市民をいくらぶんなくつてもよかった。

六二 黄金のマインツ

ライン河とマイン河の合流点近くにあるローマ人に建てられたいと古き都市マインツ——その名はマインに由来するわけだが——は「黄金ノ羅馬」と同様「黄金の」と称された。町を見下ろす人の住む山の高みは黄金の大気という名を授かった。この都市の名の拠つて来たる所以については、根も葉もない話がたくさんでつちあげられた。容易に思いつくのは近くの河なのに。ローマ人はかしこの地に幾つもの堡壘を築いた。その廢墟はいまだに目に触れ、その名の響きはいまだに残っている。これもなお持ち堪えている堡壘と申すべき存在、すなわち、マインツに導入され、しっかりと定着したキリスト教、これがこの市を大層な繁榮に導いた。マインツの初代大司教となったヴィンフリート・ボニファティウスおよびその強力な感化によって礎が置かれ、その結果、この市の大司教座はドイツで最も重要なものとなり、マインツ大司教は後に同時に帝国の選帝侯、皇帝に次ぐ第一人者となった。し

かしながらヴィンフリートは、教会内ですますます旺盛おうせいになつた華美、権勢を常に善しとしたわけではなく、むしろこう言つて非難した、ということである。「その上聖職者は黄金こがねにして、木の聖杯カリスを用いしが、今日では木の聖職者が黄金こがねの聖杯カリスを用いおれり」と。——金言も事の成り行きもかように引き続き後代全てに継承されて行つたが、これ豈あに黄金のマインツのみに留とどまらんや。

六三 ハットー、ヘーリガー、ヴェリギス

昔むかしのマインツ大司教の三つの名前だが、とりわけこれらを民衆の言い伝えが口から口へと後の世に至るまで継承して来たものである。

ハットー(1)は至極厳しい殿だった。その気性は激し易く、信頼できず、神への畏敬いけいの念もなければ、人間愛にも欠けていた。彼は卑劣な裏切りによつて高貴なバンベルク伯アーダルバートを王ルートヴィヒ四世の陣営へと誘いざなひ、王は伯爵を斬首させた。(12)ハットー司教は自分の言うことを強調したい場合、常にこういう科白せりふを口のぼに上のぼせた由。「これが真まことでなければ、鼠ねずみどもが余よを喰くらうがよいわ」と。さて、こんなことが起こつた。ハットーが治めていた領域が大飢饉ききんになり、人人は犬や猫を食ひ、飢えた者たちが大勢窮死した。マインツの司教館には、何かお恵みを、と施物せもつを願ねがう輩やからが引きも切らずに押し寄せた。するとハットーは、貧民どもは手取り早くこの世からおさらばするのがなにより、そうすればもう腹は減らぬし、こちらもやいのやいとせがまれずに済む、と考えた。そこで、食事をふるまうかのごとく装つて、町のあらゆる貧民は市門の外のとある納屋に來たれ、と伝達させた。そして皆が中に入ると、納屋の門を閉じさせ、納屋に四隅から火を放たせた。閉じ込められた者たちがなんとも悲痛な叫び

を挙げると、残忍なハットーはこう言った。「うちの穀倉鼠どもがちゅうちゅう啼ないているのが聞こえるか。これで物乞い騒さわぎもどやうやらけりがつくだらうて。これが真でなければ、鼠どもが余を喰らうがよいわ」と。——すると、なんと、鼠の大群が納屋の焼け跡から跳び出して来て、司教に迫り、噛かみついたので、恐ろしくなった。自邸に戻って食膳しょくぜんに向かうと、鼠どもは卓子テンプルの上を駈かけ回り、ご馳走を喰らい、酒杯の中に落ち、手を噛んだ。ハットーの寢床の上にも下にも中にも鼠がおり、狂おしく体に噛みついて彼を責め苛さいなんだ。——ハットーは神の審判が下されたのを知って震え上がった。ところでビンゲンの近く、ライン河の中洲みずどらに水城が一つあった。司教はそこなら安全と急いだ。鼠どもは水を越えては来られまい、と考えたからである。しかし彼が舟に足を踏み込む前に既に鼠どもは乗っていたし、打ち殺そうとしても甲斐かはなかつた。なにしろ隠れ潜おひたんでしまうし、夥おびただしい水鼠どもが舟と競泳してビンゲン近くの塔のあるその島にやって来たからである。大いなるラインの河面に人多しといえども、ハットー司教の舟の周りの鼠の数ほどはいなかつた。そして彼が塔に入ると、鼠どもが彼に襲い掛かり、噛みつき、生きながらその肉を喰らつたので、彼は無数の噛み傷による灼やけるような地獄の苦痛を蒙こうむり、「ありとあらゆる悪魔よ、余の魂を持って行け（「ええ、糞、忌いやましい）」と罵ののつた。悪魔どもは即刻出現、炎炎と燃え上がりながらやって来て、ハットーの魂と鼠らが食い残した肉体のかけらを奪い、これをエトナ山の火口に投げ込んだ。それから、壁であれ銘板であれハットー司教の名が読まれるような場所は、彼を慰しのぶすがを根絶やしにするために鼠たちが嚙かじ取ってしまった。以来、ビンゲン近くのラインの中洲（15）にあるハットーの水城は鼠の塔と呼ばれるようになった。鼠の塔モウゼトルムについての似たような伝説はポーゼン地方でも語られていて、こちらではゴプロ湖にある。ヘーリガー大司教は信仰篤あつい御仁ごにんだった。峻厳しんげんでもあったが、廉直れんちくだった。かつてある者がマインツにやって来て、途方もないことを吹聴ふいしょうした。天国と地獄をくまなく経巡きんじゆりり、楽園では食事をした、と称したのである。さ

てそこでヘーリガーが、地獄はどんな土地柄か、と訊ねると、いかさま預言者は答えていわく「地獄は周りをびりりと生い繁った通り抜けることのできない森に囲まれております」と。ヘーリガーは哄笑して言った。「さような森の中には多分豚どもを飼うのもつてこいのどんぐりなどの餌が見つかるのである。したが、言うてみい、そのほう、天国では何を目にしたな」。――「天国では、されば、かしこにおきましたは、キリストが大きな食卓に着いていらして、^{ザンクト}聖ヨハネスが^⑬お毒味役の酌人をなさつておられるのを見まいらせました」と嘘の父の倅はぬかしたものだ。「して、キリストは聖人様がたご一同をとびきりの葡萄酒でもてなされましてな、^{ザンクト}聖ペトルスが煮方、焼き方をお引き受けて、食べ物はたっぷりござつた」。ヘーリガー司教はこう応じた。「聖ヨハネス以上の酌人をキリストはお選びにはなれなかつたであろう。なにしろあの神の使徒は決して葡萄酒を嗜まれなだゆえ。それにひきかえ、余の酌人と来たらずいぶんと飲みおるは。されど、ペトルスは天国の料理番におなりにやなれんて。あの方は天国の門番だてな。したが、言うてみい、そのほう、天国でいかような名誉に与つたかな。どんなご馳走、どんな飲み物をそのほうに天の主は下し置かれたか。どんな席でそのほうは食事をいたしたか」。――「天国の聖なるお客様がたに混じつて坐るなど、わたくしめはよいいたしませなんだ」と嘘つきは返辞した。「わたくしめは厨房の片隅にこっそり控えおり、ちっほけな肝臓とか肺臓の切れっ端などを取りまして、人目を忍んで頂戴つかまつたのでござりまする」。――「しからば、そのほう、天国で盗みを働きおつた。聖なる場所でも持つて生まれた根性を直せなかつたのだな」と司教は怒鳴つた。「そこで天国は、そのほうを罰するように、と余の許にそのほうを遣わされたわけじゃ。即刻この嘘つきめを曝し柱に括り付けて笞打たせよ。それが済んだら、どこへなとこやつが失せたいと申すところへ退散させい」。

ヴィリギス大司教は学識あり敬虔なお人で、心底謙虚だった。彼の出自は卑賤で、父は貧しい車大工だった。や

んごとない身分の聖堂参事会員たちは、自分らの場合、系図を提示して貴族であることの証明をしたり、そう誓ったりしなければならなかったので、これがためにヴィリギスをやっかみ、司教邸の扉や壁にひそかに車輪を描いて辱め、「これぞ我らが司教の家紋でござる」と嘲った。しかし信仰篤い御仁であるヴィリギスはこれを決して嘲弄と取らず、自分の寝台の上に木製の犁車すきを一つ吊させ、邸の部屋部屋に赤地に白の車輪の紋を描かせた。そしてこれに次のような章句を附した。「ヴィリギスよ、ヴィリギス、汝の出自を忘るるな」。そして後代になっても篤信の人ヴィリギスを記念して後任の大司教たちは皆この車輪を紋章として用いた。そこでマインツ市とマインツ司教領は今日に至るまでこの紋章を採用し、持ち伝えているのである。

六四 マインツの聖なる十字架

その昔マインツには一つの美しい教会があり、その名を森の我がらが聖母教会ウンツル・リベブラウ・ウィム・ツルゲといった。しかし民衆はこれを聖十字架教会と唱える。一隻の船が何人もの男女を乗せて航行していたところ、これらの人人は空中に一つの輝く十字架が浮遊するのを見た。この十字架は船を追って来て、その帆柱の頂きにくつついた。昔あった浮き棧橋たぐけいの近く、ホルツ門トッの傍に船が着くと、なんと、輝く十字架は幻影ではなく、巧みを凝らした青銅製のキリスト磔刑像で、素晴らしい名作であることが分かった。さて、それがいずこへ行く定めか解明するため、いまだ軛くひまにも車にも繋がれたことのない二頭の牡牛おかしの背に載せ、導きも牽きもしないまま歩くに任せたところ、牛たちは十字架をへヒツハイムの山上に運んだ。そこに教会が建立され、奇蹟の御像はその中に安置されて崇敬された。この十字架の前に跪ひざまずいて祈りを捧げたたくさんの病人たちが癒やされたが、ついにこの教会は他の数数とともに炎上した。ブ

ランデンブルクマルクグラール 辺境伯アルブレヒトが一五五二年マインツの町を占領した時のことである。もつとも、それからもまだ長いことホルツ門トリアとボックス門トリアの間で、上流へとそこう 遡航して来る船の帆に下がっている十字架を描いた絵が見られた。この絵の痕跡こんせきは今日なお発見できる。

聖十字架教会キルヒェン・ハイルンクローツと聖アルバン〔修道院〕の間にその昔壁のない礼拝堂が建っていて、下にマリアとヨハネスがいる木製の磔刑像が中に安置され、信徒たちに崇敬されていた。さてマインツに一人の市民が住んでいて、その名をシエルクロプフといい、賭博好きの大酒飲みだった。この男、大概是旅籠屋はたごやの花亭ツアフルムに入り浸っていた。これはかつてはマインツ郊外だったビルツバッハにあった。ある日のこと、こやつ、有り金残らず、飲む打つに注ぎ込んで、懐がすつからかんになつてしまい、べろんべろんに酔い痴れたあげく、神とあらゆる聖人を呪い、行き当たりばつたりの聖像を剣で真つ二つにしてやるわい、と誓つたもの。こうして野原をよるめき歩いていると、かの壁のない礼拝堂のところに来たので、三つの木像に走り寄り、突くは、切るは、をやらかした。すると、なんと、命の無い木像、ことに磔刑像から血がどつと流れ出した。男は驚愕きょうがくして立ちすくみ、正気を失い、剣はその手から落ちた。そしてこうした状態で見つかった、逮捕された。信心深い人たちが流れ出る血を鉢に受けた。シエルクロプフはこの前代未聞の冒瀆行為ぼうとくの廉かどで生きながら火刑に処せられた。一方奇蹟を行ったキリスト像と聖なる血は近くのかの教会に運ばれた。教会が炎上した時、この聖なる十字架像は守られて助け出され、信心深い人人はそれを今日なおマインツの聖クリストフ教会ザンクトで見ることができるといふ。

六五 ハインリヒ・女人讚美の葬礼

昔ドイツの地に、ある宮廷恋愛歌人がいて、女人を讚美する、とりわけあらゆる女人の栄光を譽め讚える甘美な唄をたくさん歌い上げた。それゆえ彼は女人讚美という名ももらった。本当の名はマイセンのハインリヒなのである。この歌人はドイツの宮廷から宮廷へと多くの旅をし、現世の愛、また神の愛を歌った。ロストツクにブランデンブルク辺境伯爵ヴァルデマールが居を構えていた。伯爵は薔薇の園を持っており、歌の祭典を催したことがあったが、師匠ハインリヒが第一人者となった。また、ある時、敵たちがハインリヒを待ち伏せし、おっとり囲んで脅しつけ、殺そうとした。彼は、どうか最後に一っだけ唄を歌わせてくれ、と頼み、許されると、天界の女人がたを讚美して、聴く者の胸を揺さぶる唄を歌い上げたので、振り上げられた武器はどれもだらりと下がり、敵たちは行く手を妨げることなく、危害を加えず、彼を立ち去らせた。歌の旅の途次、師匠ハインリヒはマインツにもやって来て、かしこで亡くなった。そして大聖堂の周歩廊の、司教座附属学校の隣に盛大な礼遇をもつて葬られた。止宿先から埋葬場所まで彼の亡骸を担ったのは女性たちで、この歌人が生涯を通じて全女性に捧げてくれた絶大な讚美のゆえに、彼を悼んで号泣し、悲嘆の声を挙げた。そして涙を注ぐと同時に、師匠ハインリヒの墓の上に極上の酒をたっぷり注いだので、葡萄酒は教会の周歩廊一面に流れ出した。やはり女性を愛し、讚美する詩人の大方にとつては、かような美酒は生きている内にくださった方がどんなにかありがたいことか、とは存ずるが。一つならずの記念碑がハインリヒ・女人讚美のためにマインツの大聖堂に建てられたし、彼の唄の数数はいままなお忘れられない。

六六 聖女ビルヒルデ

マイン河畔のホーホハイムに高貴なフランク人一族が住んでいた。近世になってもまだかしの地の車井戸の傍らに彼らの城塞の遺跡が認められたものだ。フランク王クロトヴィヒ〔「クロヴィス」〕の時代のことである。この一族の一人にイーベリヒという者がおり、女の子が生まれて、この子はビルヒルデと名付けられた。けれども聖なる洗礼を受けなかったのである。敵に蹂躪じゆうりゆうされて聖職者が悉しつじつく殺されたり、逃げ去ったりしたからに他ならない。それはともあれ、両親はこのいとけな娘を三歳でヴェルツブルクなる親戚の女性クニグンデの許もとに送り、この子はそこで教育を受け、堅信礼を受けようとする子どもたちの一人として聖職者たちに迎えられた。けれどもこの子はそれでも受洗には至らなかつたのである。なにしろ周囲はこの子が既に洗礼を施されていると思ひ込んでいたし、この子自身は自分がまだ洗礼の秘蹟を授かつていないことを知る由もなかつたから。女の子はすくすく成長して徳高く神を畏敬いけいする乙女となつた。ビルヒルデは当時なおフランク族の地にキリスト教と並んで根付いていたおぞましい異教とは無縁むゑんであり、その麗しさ、敬虔けいけんさ、淑やかさの評判は遍あまねく広くありとあらゆる地方に及んだ。その噂うわさをテューリンゲン公ラトゥルフの子息ヘターンも聞き及んだ。ヘターンは既に一度結婚しており、二人の子息がいる身で、年若のビルヒルデに求婚したのである。さてヘターンはまだ異教徒だつた。ビルヒルデは彼を配偶としたが、それはひとえに両親のたつての願ひがあつたればこそ。それに、そうすれば、夫がその家来たちともども温和なキリスト教に改宗するよううまく説得できようか、と希望していたせいもある。しかしこれはどうしても成功せず、彼女はいたく嘆き悲しんだ。そこで極めて慎ましく、装飾品など身に着けず暮らし、厳しい禁欲と懺悔ざんげの勤行に日を送つた。ヘターンは戦で殪たおれると、残された寡婦は母親が慕わしくて堪たまらなくなつた。一

つには彼女がキリスト教をテューリンゲンの民の間に布教しようと努めたのに、それを彼らから仇で返され、迫害されて、逃亡せざるを得なくなつたからでもある。そこでビルヒルデは数人の侍女とともに夜、舵も楫取りもないまま一艘の舟に乗り込んだ。けれども天使たちが現れて、この小舟を操り、浅瀬や巖礁を悉く無事に乗り切つて、フレンキツシュ・ザーレ川からマイン川へ、マイン川ではホーホハイムを通り過ぎ、長の河旅をこなし、マインツに到着した。この地の司教ジークベルトはビルヒルデのおじであり、この信仰篤い乙女を大いに歓待、住む場所を提供し、ホーホハイムの相続財産——というのも彼女の両親はそうこうするうち亡くなつていたからだ——を彼女が手に入れるのに力を貸した。その後ビルヒルデは自分の相続財産で修道院——マインツのアルテンミュンスター修道院がこれ——を建設、そこで神に身を委ね、慎み深く、慈善に努めながら暮らし、やがて生涯の終わりに近づいた。するとビルヒルデが修道院長として治めているこの修道院の三人の修道女が、自分たちの母にして長である人が洗礼を施されたことがこれまで全くない、との夢を見て、それを院長に告げた。ビルヒルデはそんなことを信じようとしなかつたし、信じることもできなかったが、やがてこのことは他の示現、あるいはある天使の声によつて彼女のおじにも明らかにされた。そこでおじはこの敬虔なキリスト者をキリスト教徒の絆の内に迎え入れたのである。その後でビルヒルデは世俗の生活から全く関係を絶ち、彼女が身罷つた時、その亡骸の周りに光彩が現れ、馥郁たる香りがその居室を満たした。その傍に近づくと、病人たちは癒やされ、盲人は目が見え、死者は歩いた。⁽²²⁾ビルヒルデはフランク族の地の最初の聖女となつた。

ビルヒルデは配偶者ヘターンがまだ存命中にかの奇蹟に操られた小舟でマインツに来たのだ、と説く者も多い。ヴェルツブルクの下手一哩のところ、マイン河畔に一つの村があり、ファイツホーホハイムというが、ビルデの生地ホーホハイムと同様、彼女はここから出たのだ、と村人は信じ込んでおり、独自の祭日を彼女のため

に設け、その聖遺物(23)の一部を保存し、崇敬している。

六七 フランク族の渉り場フルト

自由ドイツ都市フランクフルト(24)の起源はこのようだった、と伝承は物語る。カール大帝(25)（「シヤルルマーニユ」）の時代、ザクセン族がフランク族とその強大な王（「カール」）と戦い、前者が勝利を占め、メイン川下流の端まで敵軍を追い詰めた。さてフランク族はその河畔まで急行、現在フランクフルトと呼ばれる場所まで来たが、大河の幅と深さに驚愕きょうわくした。なにしろメイン川を渡るための橋も舟も無かったのである。すると、なんと、一頭の牝めすの角鹿ヒルシュが、さながら慈悲深い神のお示しによるかのように危なげもなく流れを歩いて渡り、道を教えてくれた。かくして、逃げて来たフランク族は無事安穩あんゑんに河を越えることのできる渉り場わたが分かったので、そこを渡った。追尾して来た敵軍は後から河畔に着いたものの、渉り場がどこやら分からず、見つかりもしなかったので、フランク族をそれ以上追えなかった。そこでカール大帝はこう言った由。「朕ちんがフランクの兵とともにこのたびザクセン軍から逃げた、と諸族が言おうとも、朕がここで殪たおれた、と言われるよりはましじゃ。なにしろ朕は生きていて、この身の名譽を救う力も、その意志もあるからな」と。さてフランク族はその地に入植した。美しく、実り豊かな地方だったので。そしてその場所を「フランク族の渉り場フルト」、すなわちフランクフルトと命名した。その頃同時にザクセン族が、フランクフルトとはメイン川を隔てて真向かいに位置するザクセンハウゼンの町を建設した、とする者も少なくない。しかし、カール大帝が彼に打ち負かされたザクセン族をその故地から追い立てて、フランクの地への移住を強制した時初めて、その建設が行われたのだ、と主張する異説もある。こうした移住を由来として生

まれたとされる町の名はまだたくさんある。後にカール大帝自身フランクフルトに小さな居城を築き、狩猟のために好んでそこに滞在し、復活祭を祝い、帝国会議を何度も開催した。カール大帝の子息、ルートヴィヒ王も、まさにその広大な領国の真ん中にあるこの町に居住した。それからその子息のカール、後のカール禿頭王は同地で誕生。フランク族の渉り場であり、フランクフルトの最初の定住地とその名称の元となったかの浅瀬はいまなおそれと示されるし、カール皇帝の居城があったところには現在、聖、レーオンハルト教会が建っている。それからルートヴィヒ敬虔王・帝が築いた新たな居城、ザール城はファール門の隣にあつた。その名はザール小路として今日に至るまで残されている。ルートヴィヒ敬虔王の末子、ルートヴィヒドイツ人王、およびその妃ヘマはザール城で亡くなった。フランクフルトを東フランク王国の世俗の首都としたのはこの王に他ならない。なお、宗教上の首都はマインツだった。

六八 王の降誕祭

現在フランクフルトの大聖堂が建っているところに、ルートヴィヒドイツ人王の時代に礼拝堂があつた。これはルートリントと呼ばれたが、後には、聖、救世主ともいわれた。聖処女マリアとカール大帝に奉獻されたものである。ルートヴィヒドイツ人王は降誕祭をフランクフルトの居城で祝ったが、そこに王国集会を招集した。すると悪魔が聖職者かつ天使の姿となってルートヴィヒの子息カールに近づき、こう語り掛けた。「さてさて、そなたはご兄弟の中で一番末じゃ。そしてそなたの父上はそなたの兄上カールマンに王国を進ぜるおつもり。なれどこの国は神によってそなたのものと定められておるでな、父上がそなたを滅ぼそうとしても、さようなことを神はお許しに

ならぬ」。しかしカールはこうした誘惑に仰天して、急いで礼拝堂に逃げ込んだ。——「誘惑者（＝悪魔）よ、去れ。きさまは天の御使ではない」と叫びながら。——けれども悪魔はその後に随いて教会に入り、「わたしが天の使いでないなら、そなたとともにこの神の家に足を踏み入れることなどどうして許されよう。祭壇の秘蹟、聖なるミサの犠牲（＝聖餐式）を執り行うことなどどうして許されよう」と言つて、地獄の詐術でカールを惑わし、ミサを司式し、祝福された聖餅をカールに与え、その聖餅とともにカールの中に入つて、彼に取り憑いた。

さて王国集会の折、カールは訳の分からぬことを口走り、脇に吊つた剣帯を引つ外し、剣もろとも広間の真ん中に放り投げ、腰帯と衣服をかなぐり捨て、ごろごろと激しく転げ回つたので、居並ぶ者たちはだれもかれも驚愕した。けれども司教たちが悪しき敵（＝悪魔）に憑かれた彼を取り押さえ、先の礼拝堂に連れて行き、大司教が彼にミサを行い始めた。するとカールは大声でかきくどき、悲鳴に次ぐ悲鳴を挙げ、ミサが終わるまでこれがずっと続いたが、聖職者たちは悪魔が王子から去るまで祈禱を止めなかつた。かくしてカールは神の慈悲により癒やされたのである。しかしそれでも悪魔の邪心が王子に吹き込んだことは後に実現した。なにせカールマンとルートヴィヒは二人とも彼に先んじて死に、カールはドイツ王国の王冠を手に入れたのだから。僅かな間に過ぎなかつたとは申しながら。というのも、カールは憂鬱症に陥り、全く僧侶たちの腕にその身を委ねたのだから。そこで王国の諸侯は驚愕し、彼の兄カールマンの実子アルヌルフに王国を渡したのである。

六九 エッシェンハイム塔の話

フランクフルトにはかつて市壁の一部だったごく古い塔がまだに立っている。その昔フランクフルト市民が密

獵者⁽³³⁾を捕らえたことがある。その名をヘンゼル・ヴィンケルゼーといい、「死刑」判決が執行される前、「塔の地下の」真つ暗な牢獄にも九日も入っていた。そして風見がエッシエンハイム塔⁽³⁴⁾の天辺なる楽しい棲処^{すみか}でキイキイ、ガタガタ騒ぐのを夜毎聴かされ、こう言った。「おれが自由の身で、好きなように撃たせてもらえらるなら、きさまを撃つてやるわ、いやらしい風見め。——おれが入れられた夜と同じ数だけ薄鉄^{うすがね}に穴を開けてみせる」。この独り言を耳にした牢番は自由都市の市長にそれを伝えた。すると市長いわく「そやつに相応のお恵みは吹きつ曝^{さら}しの絞首台⁽³⁶⁾以外にはない。したが、さように大した名射手だと言ひ張るなら、そやつに運を試させてやるがよからう」。

——かくしてヴィンケルゼーには所持していた銃が渡され、「豪語したことをやってみせい。それができたら、無罪放免にして遣わす。しかし一発でもしくじつたら、ぶらんこ往生^{おんどり}だ。雄鶏^{おんどり}はきさまのことで啼^なきはせん」(「|| だあれもきさまなんぞ気にしはせん」と言い渡された。獵師は愛銃を手にすると、めでたい狩詞^{かりことば}(³⁵)を語り掛けて励ました。すると小さい穴が一つ薄鉄に開いた。並み居る一同は大笑いして、見事^{ブライヴ}、と叫んだ。それからまだ後八回これが行われ、どの弾丸もしかるべき場所に命中、九回目⁽³⁹⁾の射撃で「九つ当たり」を達成した。この「九つ当たり」は今日なおエッシエンハイム塔の風見に見ることができ。さて市参事会の面面だが、心中こう考えた。「いやはや、これは一大事だて。我らが哀れな牡角鹿^{ヒルシユ}その他の獵獣^{ヒルシユ}どもにはなあ。こんな名射手の大泥棒がおつ放^{ばな}されて森に戻った日には」。——そこで鳩首協議^{きあしり}の結果、市長の言うよう「のう、ヘンゼル。そのほうの射撃が巧みなことは、当市の獵獣の数がなんとも情けないありさまゆえ、我らとつくに察しておったし、今その腕前をしつつかと見届けました。ここに留^{とど}まれ。当市の市民軍の射撃隊長になるがよい」。——しかしヘンゼルはこう答えた。「旦那がた、御免蒙^{うむ}つて申し上げますが、おれは薄鉄を撃ち当てました。そういうこつて、お申し出くだ

すった射撃隊長の職も撃つちまいまさあ。旦那がたの屋根の風見はおれにはうるさ過ぎますし、旦那がたの雄鶏はおれにはろくすっぽ啼いちゃくれません（「旦那がたはおれのことなんぞろくすっぽ気にしてやしません」。もう旦那がたには金輪際お目に懸かりませんし、旦那がたに取っ捕まることだつてありやあしません。お宿に泊めてくださつてありがとうござんした」。そして銃を持つと、傲然と歩み去つた。さて、雄鶏云云でヘンゼルが述べたのは嘲弄に過ぎず、彼が仄めかしたのはフランクフルトの象徴であるザクセンホイザー橋の真ん中にある黄金鍍金の雄鶏のこと。この橋を架けるのにその昔悪魔が手を貸した。請け負つた建築の棟梁がどうにもうまくできないので、悪魔に、助けてくれ、と言ひ、橋を最初に渡る者の魂をやる、と約束した。さて、それから早暁、真つ先に一羽の雄鶏に橋を渡らせたのである。そこで悪魔はかんかんになり、雄鶏を引き裂き、橋の真ん中を貫いて投げ落とした。それで穴が二つできた。これは今日まで修理修復され得ないでいる。昼間塞いだのが夜落ちていろのだ。もつとも橋の上にその雄鶏〔の姿〕がいついつまでもの徴として安置された。ヘンゼル・ヴィンケルゼーが、ろくすっぽ啼いちゃくれません、と言つたのは、取りも直さず、全然啼かない、という意味だつたわけ。

七〇 フアルケンシュタインの悪魔の道

マイン河畔のフランクフルトから四時間行程の丘の、ほとんど到達し難い巖上にフアルケンシュタインの城塞の廢墟が聳えている。これぞタウヌスとヴェッターアウで権勢を誇つた一族の揺籃の地である。一族の子孫の何人かはトリリア大司教にすらなつた。ザインのある騎士がフアルケンシュタイン家の息女に恋したが、その父親は男を嫌い、こんな人を喰つた口上を並べて騎士の求婚を断つた。「わしは喜んで貴殿に娘を花嫁御寮として進ぜたい。

ただささやかなお返しを頂戴いたすが、このぎざぎざの巖山に騎馬で通行できる道を一夜で作って欲しい。——これがわしの条件でな。これで決まりじゃ」。不可能な要求だった。仮に同時に何千もの人手を掛けて堅い巖石に道を刻み込むとしても、そんな短い期間に作業を終わるなどということはできっこなかった。ザイン騎士——名はクーンといった——は悄然と引き下がり、聖地へ起き、サラセン人との夥しい会戦で勇猛果敢に闘い、死に場所を求めたが、遂に見つかからずじまい。我が恋を思い続けて止まぬまま、とうとう故郷へ立ち戻った。懊惱しながら彼は、いとしい女性の消息が得られれば、と巖の上に聳え立つファルケンシュタイン城の周りを彷徨い歩き——その堅さ（「苛酷さ」）で己が運命を象徴している巖を陰鬱に凝視した。ここでは人力は役には立たない、この巖に道を拓けるのは魔法だけだ、と騎士は溜息をついた。はて——その時彼はだれかが自分の名を呼ぶのが聞こえたような気がしたし、そこで振り向くと、茶色の上つ張りを纏い、白髪で皺くちやの顔をした地中の小人が一人、巖の裂け目からそこに出現しており、奇妙な声でこう語り掛けた。「クーン・フォン・ザインよ、おぬしはどうして城山下的おぬしの所領で銀を掘らせおって、わしらの安息を妨げるのか。おぬしはこの巖に道を拓きたいのか。ファルケンシュタインの女子相続人を、あの高みでまだ独りぼっちでおぬしのことを嘆き、おぬしを慕っているあの姫を、己がものとしたいのか。それなら一つだけ誓いを立て、それを守る、と約束せい」。

かようなものが出現し、かようなことを告げたので騎士は妙な気分になった。そしてこれは悪しき敵（「悪魔」）の誘惑かなにかかも知れぬ、誓え、と言われるのは、自分の魂のことではないか、と考えた。そこで、びくともせずに「おまえの要求は何か」と訊ねた。——すると地中の小人は言った。「おぬしの騎士としての言葉にかけて、明日、その日のうちに鉦坑、縦坑、横坑をすっかり埋めさせる、と約束してくれい。どのみち、我ら、やろうと思えばこれらを水浸しにできはするがな。——約束してくれれば、我ら、今夜中に巖をならしておこう。わしが言う

たことをおぬしが実行すれば、おぬし、白昼に馬で城へ上がり、ファルケンシュタインの城主にやつの約束を思い起こさせることができる」。——これを聞いて騎士は有頂天になり、小さな地中の小人の要求を喜んで承諾し、のんびり床に就いた。夜になると、城の周りには驚くべきことが起こった。ガラガラ、メリメリ、ゴトゴト、ドンドン、カチカチ、ザクザクの大騒ぎ。何千もの小さな山の精——この連中、体はちっぽけだが、力は巨人並み——が総懸かりで請け合った工事を推進し、雄鶏が啼いて暁を告げた時には終わっていた。そして太陽が遙かなシュペッサルト山地の後ろから昇って来た時、クーン・フォン・ザインは早くも新しくできた道を騎馬で上がって行き、角笛を啣^{りあがり}と吹き鳴らした。そこでファルケンシュタイン城の塔上の見張りは少なからず仰天したし、ファルケンシュタインの城主はなおさらだった。しかし城主は長らく熱望していた道も嬉しく、約束を遵守し、相思相愛の二人を結婚させた。同様にザイン騎士クーノは小人にした自分の誓言を実行、銀鉱山の坑道を土砂で塞ぎ、廢坑にした。地霊が拓いた巖の小径は今日なお悪魔の道と呼ばれている。これは城山下の地霊の棲処であるアルトキングの西側からシエルトの洞窟^{どくつ}を通って山上に達する。

七一 エップシュタイン一族

今あるエップシュタインの町周辺の錯雑した巖の狭間や暗鬱な峡谷に、その昔、一人の荒くれた巨人が棲みついていた。こやつは乙女たちを待ち伏せし、だれか一人を捉えるたびに、先方のご意向より自分の勝手を重んじるもてなしをつかまつた。ある時、ファルケンシュタインの姫君を拐かすのに成功したが、この姫君にはさる高貴な

騎士が想いを寄せていた。エツポという名のこの騎士は、巨人と闘うか、あるいは策略で打ち負かそうと、急遽その跡を追ったが、鉄でできた網を携えていて、これがある場所に仕掛けた。それから巨人がこちらを見つけた時、すぐにそれとは見分けられないよう、盾持ちがエツポの衣服と甲冑を纏わなければならなかった。エツポは盾持ちの装束を身に着けたのである。巨人は自分を追跡して来る騎士のことなどこれっぽかしも注意していなかった。こやつ頭を占めていたのはただ虜にした女性のことばかりで、これまで他の乙女にしたことを彼女にもしようとした。しかし守護精霊が彼女に随き従っていたのである。この守護精霊に対しては巨人の強さもその魔力——というのはこやつは魔法使いだっただけ——も何一つ果たせなかった。こうした不首尾にかんかん腹を立てた巨人は今度はエツポに立ち向かうことにし、相手がこちらへやって来るのを目にする、魔法の伎倆と力を駆使してエツポの従士を巖に変え、これで敵手を充分な期間呪封してやったわい、と思つた。次いで、騎士の家来どももすつかり片づけてしまおう、と勢い込んで前進した。しかしそのとたん巨人は例の鉄の網に落ちてしまい、中ではたまた大暴れしたが、網を引きちぎることができなかった。そこへ盾持ち姿の騎士が隠れ場所から現れて、巨人を高い巖山の上へ引きずって行き、そこから下へ突き落とした。それから巨人の虜だった姫君を束縛から解放、奥方に迎えた。残念ながらエツポは魔法を掛けられた盾持ちを救うことはできず、彼は今日なお巖と同様こんこちらに強張ったままで、事実巖そのものである。これは男石と呼ばれている。その後エツポ騎士は、自分が巨人を突き落とした巖山の上に新たに城塞を築いた。これなんすなわち後代のエツポの石城である。で、その城門の九天井の梁には曲がった石の代わりに例の巨人の肋骨を埋め込んで繋ぎ留めた。さて、騎士とその夫人の子孫として数代の英雄しい勇士たちと偉大な高位聖職者が数えられる。騎士身分の人たちには皇帝じきじきに上タウヌスの特命使節職を下し置かれたし、エツプシュタイン家の五人もが次次にマインツ大司教の座を確保した。そのうち三

人の名はそれぞれジークフリート、ヴェルナー、ゲーアハルトである。このゲーアハルトは代代のマインツ司教の系譜では二番目にその名を連ねているが、頑冥かつ傲岸不遜な御仁だった。さるドイツ皇帝（「神聖ローマ皇帝」）が彼とは別の意向を示した時、腰の提げ囊を叩いて大声を張り上げた。「ええまあ、忌ましい。皇帝の思惑が余のそれとは異なるのであれば、この囊の中に別の皇帝を用意いたしておるわ」。——ある時、ある皇帝が彼の意図に添わなかったことがあった。すると大司教は怒って自分の角笛を擱んでこう叫んだ。「皇帝め、神の呵責で大恥をかきおれい。余の思いのままになるものなら、この角笛から別の皇帝を吹き出してくれよう」。——これはあながち法螺を吹いたわけではない。アードルフ伯爵に力添えして帝冠を得させようとしたのはこの人であった。そしてそれから引き下ろすのに荷担したのも。しかし後には衰運に向かい、己の不遜さを悔いる理由をたつぷり見せつけられた。

七二 血の科の木

ヴィースバーデン近郊、フラウエンシュタイン城の廃墟の傍らに巨大な科の木が一本立っている。この樹についてこんな伝説が語られている。昔この場所でごく悲しいことが起こった。フラウエンシュタイン一族のある姫君が自分と生まれの同等でない若者に恋をし、夕方城塞の外に出て城壁の近くの心地よく小暗い一画でしばしば逢引きをした。ここへは普段は常に閉ざされている小さな門から出られ、その鍵は乙女だけが携えていたので。姫の厳しく、かつ気位の高い父親がとうとうこの逢瀬に気づいて激怒し、恋人たちの不意を襲い、我と我が手で姫の相手を斬り殺した。息女は悲嘆の涙にくれながら科の木の若枝を折り取って、愛しい男の血の泌み込んだ土にそれを挿

し、父親には二度と再び言葉を掛けず、最寄りの修道院に入った。来る日も来る日も彼女は斬り殺された愛人を偲んで泣いたが、科リンデの木の若枝は根を張り、芽吹き、樹となり、男を慕って悼み続けるこの女性が生きて涙を流している間、だれかがこの科リンデの木の葉を一枚もぎったり、枝を一本折ったりすると、そこから血が流れ出すのだった。もつともやがてそんなことをする者はいなくなつた。畏れ憚おそられたので。こうして血フルートリンデの科の木はどんどん伸びて大層な高さとなつた。現在その幹周りは男四人が手を繋いでやつと囲めるくらいである。

近くにグラローダー農場ホーッなると古き農家がある。これについて類縁の伝説が語られている。ラーンガウのさる伯爵家の年若な御曹司おんぞうしがその一族とは出自の等しからざる少女に恋した。それゆえ父親は激怒し、二度と再び面前に現れるな、と勘当した。若い騎士の方も言われた通りに立ち去り、心の欲するまま、愛の命じるままに従つた。しかしそのうち老伯爵の周辺で疫病(19)が始まつた——妻が死に、娘たちが死に、それから四人の花も盛りの息子たちが同時に病んで、一人また一人と死んで行き、最後に残つた者も——やはり亡くなつた。天涯孤独の身となり、跡継ぎの子どもがすっかり絶えた老人は勘当した息子を思つて懊惱おりのうした。あれが生き長らえていて、わしの傍にいてくれれば、もはやあれの恋のゆえに勘当などせぬものを。だが、まだあれは生きているだろうか、と。——そこで老伯爵は旅立ち、息子を捜してライン河畔をあちこち当たり、それからラインに流れ込んでいる支流の河谷やそれらのまた支流の河谷、そして山を歩き回つた。ある時疲れ切つてとある小さな葡萄栽培農家ぶどうに辿り着いた。そこで出逢つたのは葡萄栽培農夫夫妻、それから多分その子どもたちにも。そしてこの人人が周りの巖だらけの土地を開墾し、葡萄の木を植えたことによつて麴パンを得ているのを見た。老人が空腹だったので、彼らはこの麴を老人と分かち合つた。若い妻は陶器の鉢から葡萄の房を出してくれた。そしてその夫は、ぴかぴかの二股鉞ふたまたぐわ、常不断勤勉じょうふたんけんに使用しているのでぴかぴか光っている鉞を肩に担いで歩み寄つて来た。その時老伯爵は、その葡萄摘み農夫

が自分の息子だ、と一遍で分かり、抱きついて、涙を流し、祝福した。その後騎士は自分の葡萄酒山の農家を見下ろす位置に城を築き、そこへ家族ともども引き移った。というのも、自分が妻と力を合わせて開墾し耕作した地所から去りたくなかったからである。この地所は後代、伯爵開墾農場、あるいは縮めて、グラローダー農場と呼ばれるようになった。伯爵が開墾したからである。老伯爵はそれからまだ何年も何年も子どもや孫たちと一緒に暮らした。そして若い伯爵は胄飾りの紋章として、肩に銀の開墾鋤を担いでいる黒い短上衣姿の髯男を採用、彼自身が愛しい女性と力を合わせて土地を開墾した記念とした。ライン河畔なるシーアシュタインの古い教会でまだこの一族の墓石を見ることが出来る。

七三 神の難儀

ライン河畔のリューデスハイムで、ブレムザー・フォン・リューデスハイムという雄雄しい一族がいと古き砦に住んでいた。この砦の建設はローマ時代に遡る。そしてここから更に下流、木木の生い繁る山の頂きに神の難儀という奇妙な名の付いた修道院がある。一人のブレムザー・フォン・リューデスハイムがパレスチナへ出征、その地で数多くの勲を挙げ、数多くのサラセン人に打ち勝ち、また一頭の龍と闘い、これも斃した。しかしこの際、あるいはその後すぐに不信の輩の手に落ち、重い鎖を負うことを強いられた。そこで彼は牢獄の中で、もし自分が命長らえて故郷に戻ったら、いとけない子どもも時置いて来た娘を天に奉獻する、と誓った。すると、なんと、騎士の鎖がその身から外れた。天は捧げられた犠牲を嘉納したのである。騎士は脱走し、故郷指して急いだ。麗しく、また、花も盛りに成長した娘は大喜びで彼を迎えたが、例の誓言を打ち明けられると、死神のように蒼ざめた。

——彼女は前からある騎士を恋い慕っていて、騎士からの申込みがあったら、父親は喜んで承知してくれるものと確信していたのである。しかしながら懇願も涙も無益だった。父親は、自分の騎士としての誓言を天に對して守らねばならぬ、と思っていたので。娘は大声で嘆き悲しみながらブレムザー城を飛び出し、最寄りの巖に攀じ登ると、流れにさつと身を投げた。父親の苦悩は大きかった。今や誓いを守ることができなくなったからである。そこで愛しい娘の死霊を鎮めるため、修道院を建立する、と再度の誓いを立てた。けれど一月、また一月が経つうち、老ブレムザーはどうやらリユーデスハイムの古酒の力を借りて己が苦悩を払い除けたらしい。そのため記憶力がいささか怪しくなった。——するとある時悪夢を見た。彼がパレスチナで斃した龍が再び傍らに出現、しかも生きていて、かつと口を開いてふうつと息を吐きかけ、丸ごとペロりと呑み込もうとした。——すると娘が現れ、龍に、立ち去れ、と合図し、なんとも憂愁に満ちた風情でブレムザーを見詰め、それから姿を消したのだ。

ところでその翌朝、ブレムザーの作男がやって来て、こう言上した。「わしが夜明けがた、犁と牡牛どもとで畑地を耕しておりましたら、なんだか訴えるような声が聞こえましてな、ひっきりなしにこう叫ぶですが。『神の難儀、神の難儀』とな。そうしたら牡牛どもは犁を牽こうとしませんで、地面を足で引つ掻くばかりになりやした」と。ブレムザー騎士がすぐさま自身耕地に赴くと、彼も同じ悲嘆の声「神の難儀、神の難儀」を耳にした。これは牡牛たちが立ち止まって足掻いている場所のすぐ近くから洩れていて、それもある木の洞から出ているのだった。騎士は大声を挙げて探しに掛かったが、何も見つからなかった。そこで木に割れ目を入れさせたところ、空ろな幹の中の根元からご聖体と木製のキリスト受難像が納められた聖体顕示台が発見された。この宝物が木から取り出されると、声はひっそりし、牡牛どもも落ち着いた。どこかのユタヤ人が近隣の教会から二つの聖なる品を盗み出し、そこに隠したのである。このためブレムザーは誓約の実行を身に沁みて思い出し、修道院を建立、

空ろな木のあつた場所に祭壇を設け、そこにキリスト像を安置させた。こうしたことどもが神ノイト・ゴッテスの難儀と名付けられた修道院に纏まつわる話である。この御像には数多くの巡礼行がライン河畔の上流下流のそちこちから行われ、しばしば一日に六千人もの信心深い巡礼者が参詣した。そしてこの御像はその昔大層な奇蹟を示した。

七四 レーダーベルク

ナツサウから程遠からぬレーダーベルクの山上にその昔修道院が建っていた、ということである。その名残の瓦礫がれきはいくらかいまに見られるが、どの修道会に属していたのか、知る者はない。かつて一人の肉屋が家畜を賣い入れるため夕方頃ナツサウを出た。街道を辿たどっていると、先を一台の馬車が進んでいるので、ずっとその後を随ついて行き、もう道には注意しなかつた。そのうち突然馬車が道路に面して建っている大きくて立派な田舎家いなかやの前で停とまった。もつとも肉屋は、街道をよく通るのに、こんな建物をこれまで見た覚えはなかつた。家には明明と燈火とうかが灯ともっており、馬車から三人の修道士が下りるのが見えた。三人はその家へ入って行つた。肉屋は、この家は旅籠屋カストハウスだらう、と考え、同じく後に随ついて入つた。家の様子を知らなかつたし、場合によっては宿を求めよう、と思つて。彼は修道士たちがある部屋に入つて行くのを目にした。そこには死にかけている男が一人横たわつてゐようだった。臨終の秘蹟ミシキを授かるため僧たちを待つてゐたのだ。次いで肉屋は大きな食堂に足を踏み入れた。そこには——肉屋にはそう思われたのだが——大勢の客が集つつていて、料理を食ひ、かなり騒々しく酒盛りをしてゐた。肉屋が部屋に踏み込むと、全員急にふっと口をつぐんでしまった。——しかし上座に席を占めていた男が立ち上がり、肉屋に酒杯を差し出しながら、「もう一日を」と言つた。——肉屋はその声を聞いてぞつと寒気がし、喉のど

の渴きなど丸きり消し飛んだ。——するとまた一人の男が立ち上がり、傍に近寄り、前の者と同様、飲め、とばかりに酒杯を差し出し、これまた「もう一日を」と言った。——しかし肉屋は断った。するとまたまたもう一人が立ち上がり、こちらへやって来ると、「それからもう一日を」と言った。今度のところ肉屋は飲んで、無礼に思われないように、返杯した。——四人目がこちらへ向かつて来て、同様に酒杯を差し出そうとする様子を見た時、肉屋は不気味でたまらなくなり、胸元で十字を切った。——すると突然何もかもぱつと消え失せ、辺りは夜更けで、肉屋は全く独りぼっちだった。そこがどこだかさっぱり分からず、周囲は生い繁った藪と廢墟の壁だった。この荒涼とした場所で肉屋は震え戦おのきながら朝が来るのを待ち焦がれた。そして夜が明け初そめると、自分が街道からずつと、ずつと逸それた、レーダーベルク山上の崩れた修道院の瓦礫の真ん中にいるのに気づいた。久しく人の通ったためしのない、石ころだらけの道をなんとか戻り、商用などは中止して、ともかく司祭もとの許もとに行き、どんな体験をしたか打ち明けた。それから丁度三日後に肉屋は死んだ。

七五 囁ささき声

ロルヒから程遠からぬ、フイスター・ケッセルの囁ささき谷、フイスター・パッハの畔ほとりに一軒の水車小屋がある。ここに粉挽ひきとその妻と数人の子どもがごく楽しく幸せに暮らしていた。この家は山裾すそのすぐ傍に建っていたが、山上にはカマーベルクとラインベルクの古城がある。ある時こんなことが起こった。粉挽ひきの女房が、だれかが自分の耳に囁ささくような声を聴いたのだ。でもだれの姿も見えなかつたが。——そしてまたしてもこんな囁ささき。「カマーベルクへ登れ、塔の中の宝を取れ——これはおまえのものと定められているのだ——鍵は黒い櫃ひつに挿ひさっている」と。女房は不安な気持ちにな

り、しよつちゆう身の周りでひそひそ囁く声が聞こえる、と亭主に語ったが、亭主は「ばかばかしい。夢だよ。妄想だよ。——そんなこたあ氣にするんじゃない。——わしらの宝つてのはあの白塗りの粉の櫃びつさね」と片づけた。——それでも女房はひつきりなしにあの囁き声が聞こえ、もう居ても立ってもいられなくなつたし、授けてもらえろというならその宝が欲しいとも思つたので、ある朝のこと、粉挽きが溪谷のずつと上の方で囁フレスガき川の中に堰堤えんたいを築かなければならなくなり、そうすぐには家へ戻れない、と思うと言つて出て行つた時、女房はまだ乳呑み児である末っ子と一緒にこっそりカマーベルク指して登つて行つた。一方粉挽きは仕事と思つたより早く終わり、帰宅した。丁度正午で昼飯時だつた。が、女房は留守だつた。「おつかさんはどうした」と訊くと、長男が言うには、母親が一番下の子を抱っこしてもう二、三時間も前に山へ上がつて行つた、とのこと。粉挽きが急いで登つて行き、瓦礫がれきの中に足を踏み入れたところ、子どもがしくしく泣いているのが聞こえた。——その泣き声は崩れかけた塔の穴蔵から出ているのだつた。下へ降りてみると、妻が死んだようになって床に横たわつていた。粉挽きは急いで女房と子どもを廢墟から引つ張り出し、背負つたり、引きずつたりして二人を家に連れ下ろした。さて、長いこと失神していた粉挽きの妻が我に返ると、こんなことを物語つた。「あの囁き声のせいであたしは夜も昼も気が休まらなかつた。どうしても山に登らなくっちゃならなかつた。登る途中でもあの声は囁き続けだつた。『怖がつたり心配したりするんじゃない。おまえの身には何も起こりゃしない。ただ、絶対口を利いちゃならない』つてね。それであの塔の穴蔵に降りたの。——そこには櫃があつた。櫃には鍵が挿さつてた。開くと——きらきら光る黄金が入つてた——ただ取ればいいだけだつた——その時急にうちの大きい方のぼうずが後ろから怒鳴つたの。『母さん、母さん』つて。それで思わずあたし、『どうしたんだい』と言つちまつた。するとおつそろしいがらがらつて音がした。まるで、上の塔と壁があたしと子どもの上に崩れ落ちて来たみたいに。そしてこんな叫び声が聞こえた。

『なんてことだ、なんてことだ。どうしておまえは口を利いた。これでもうおれはまたしても救われなまま、何百年か待たなくてはならん』⁽⁵⁴⁾って。——そこで粉挽きの女房は目の前が真っ暗になってしまったのだった。——こう亭主に物語ると、彼女は重病になり、三日後亡骸^{なきがら}になった。これはこの粉挽き自身が主^{しゅ}のご生誕後一八〇〇と四〇年に語った話である。

七六 燃える炭

ライン河畔の小邑^{しょうゆう}ロルヒで囃^{フイスパ}き川がこの大河に流れ込んでいるが、市壁に沿ってこれまた水車小屋が一つある。その水車は囃^{フイスパ}き川の急な流れが回している。ある夜のこと、この水車小屋の女中がとても早く目を覚ました。辺りがなんととも明るくなっていたので、これは寝過^{なまがら}ごしてしまった、と思い込んだのである。そこで急いで台所へ行き、火を起こそうとした。ところが台所の窓から中庭を見下ろすと、一山のかっかと燃えている炭に気づいた。そこで急いで下に降り、そこから手っ取り早く竈^{かまど}用の火種をいただこうとした。下の中庭の炭火の周りには見たこともない余所者^{よそ者}の男たちが数人横になっていた。しかし女中はこの連中のことなど気にも懸けず、持って来た十能を炭の山に突っ込み、十能一杯の炭火を持って家の中に引き返した。が、炭火を竈にぶちまけると、もうそれは燃えていないで、消えてしまっていた。女中はすぐさまもう一度外に出て、また十能一杯持って来た——けれど最初のやつと全く同様炭の火は消えていた。そこで甲斐^{かい}甲斐^{がい}しい女中はもう一遍外へ走り出た。すると男たちの一人が低い声で「なあ、おい、もうこれつきりだぞ」と言った。——女中はびっくり仰天して、ぞくぞくとしたが、口を利かずに、ただもう遮^{しや}二無^{にむ}二竈^{にむ}に戻った。ところが炭はまたしても火が消えていたのである。——そしてその時

町の教会の塔の時計が鳴り始めた——女中は耳を傾け、いったい何時なのか知りたくて、数えた。——三つ——四つ——六つ——七つ——まっさか、そんなに朝遅いはずないわ——八つ——九つ——なによ、これって——そして塔の時計はずっと鳴り続け、とうとう十二を打った——中庭の炭火は消え失せ、男たちも消え失せた。女中は怖くてぞぞつと身の毛がよだち、自分の寝部屋に急ぎ、布団の中にすっぽり潜り込むと、知っているだけ、できるだけたくさん、ソイフアラインと韻文短祈祷(55)を唱えた。ライムベイトラン。朝方女中は今度は本当に寝過(56)ごした。代わりに粉挽きが先に台所に入り、燃えている炭ではなく一山のきらきら輝く金貨が竈にあるのを見て目を疑う思いだった。粉挽きはこの宝を手に入れて、それでロルヒの町中に家を一軒新築したし、女中にも彼女のお蔭かげで得られた富の分け前をちゃんと言った。

七七 死を告げる鳩はと

アルムスハイムの教会墓地に犁すきの上に鳩が止まっている図が刻まれた墓石がある。もう何年も何年も前のこと、この地に若い夫婦が暮らしていた。妻は一羽の馴なれた鳩を飼っていた。これは彼女のお気に入り、彼女が鳩に与えるものをその口からついでばむのだった。若妻は妊娠なしていた。そしてある春の朝のこと、何かこう不安でたまらなくなった。丁度夫は畑へ種蒔まきに行くところだった。種蒔き時だったし、その朝は風が静かで、晴れていたからである。けれども妻は「あたしの傍にいてちょうだい」と心底から夫に頼んだ。——でも夫は、仕事が差し迫っているから、と言いつつ、急いで出掛けて、早く帰って来る、と約束した。——しかしまだ種を半分も蒔かないでいた時に、妻のお気に入り鳩が飛んで来て、周りをばさばさ飛び回り、畑に置かれた犁の上に止まり、種蒔き男

を見詰めて、羽ばたきをした。それでも男が仕事を止めないでいると、鳩はその胸に飛んで来て、顎を突ついた。そこで男は妻のことを思い出し、家路を急いだ。すると美しい若妻が寢床で死んでいるのを見つけたのだ。手助けする者もなく出産したのである。そして二人の健やかな子どもたちがその腕に抱かれていた。彼女が助けを求められる者はだれもいなかったし、夫は彼女の控えめな願いが分からなかった。信実ある鳩がいなかったら、赤児たちも息を引き取っていたらう。夫は生涯妻を悼み続け、決して再婚しようとせず、双子を愛情籠めて育て上げた。彼は妻の墓に鳩の像を彫らせ、しばしば真夜中頃故人の墓で祈った。

まだ他にも鳩に纏わる伝説がある。その一つは宝の有り場所を知らせてくれたもので、今一つは、町を砲撃しようとする敵軍を阻止したというものである。

七八 トハウンの猿

小邑ジンメルンを見下ろす高みに古いライン伯爵領の城郭トハウンがある。これは至極堂堂として壮麗な伯爵家の館で、列柱で飾られたみごとな居館がある。——そしてこの居館への入り口の上に石に刻まれた象徴が見られるが、これは子どもに林檎を差し出している一匹の猿である。この猿の像についてはこんな伝説が語られている。昔、城伯に子どもが一人いた。この子には子守女が付いていて、日蔭になった城の中庭で揺り籠に入れてあやしていた。夏の日のこととて蒸し暑かったので、女はついうとうとしてしまい、ふと目を覚ますと、子どもは揺り籠の中からいなくなっていた。さあもう子守女は心配で心配で堪らなくなった。そこいら中探して廻り、どこもかしこも覗いたけれど、子どもの行方ほとんど分からぬままだったからである。そこで恐怖で居ても立ってもいら

れなくなつた彼女は、伯爵夫人と伯爵の激怒を思つて震え戦き、ただもう助かりたい一心で、森に駈け込んだ。もしかしたら何か手懸かりが見つかるかも、と。暗い繁みに入つたところ、なんと、そこに伯爵が飼つている猿が坐つていたのだ。猿は伯爵の小さな若様を毛むくじやらの両腕に抱き、いとも優しく接吻し揺さぶつて、それからそおつと苔の臥床に横たえて、林檎を一つ差し出したが、子どもはこれを受け取らないですやすや寝入つた。すると猿はしばらく子どもから蠅を追つていたが、やがて自分も眠つてしまつた。子守女は喜んで、静かに忍び寄り、子どもを抱き上げると、浮き浮きとまたトハウンの城塞へと連れ帰つた。城ではだれもかれも大騒ぎで、子守の名を呼んで探し回つていた。そこで彼女は大声で猿の行いを報告、初めは仰天、今度は有頂天になつた両親は、猿のしたことを石に刻み、みごとな居館に入る玄関口の迫持の上に置いて、永遠の記念としたのである。

七九 坊さんの帽子

ナーエ河谷を見下ろす高みと天との間に険しく切り立って聳える幾つもの巨巖の間に現在、かつて誇り高かつたライングラーフエンシュタイン城の廢墟が見られる。狩猟好きで勇敢なある若いライン伯爵がカウツエンブルクに住んでいた。彼は、かのとてつもない巖山の上に、ジツキンゲン一族の根城であるエーベルンブルクのように堂堂とした、敵を寄せつけない城塞を築きたい、と念願していた。——ある時こうした熱い物思いに耽りながら、頂きにまだ人が登攀したためしのない巨巖の近くをぶらついていた。すると、その名を挙げるのは憚られる者〔「悪魔」が相手となりしやしやり出た。こやつは若いライン伯爵の心にある願いを読み取り、こう語り掛

けたもの。「あの高みに城、みごとで、壮大で、難攻不落なのをね、さよう、そういうのをあんたさん、お望みなわけですな。そうでしょうが。ただ棟梁とうりやうがおらん、と。——さようさ、それでだれかがまかり出て、一夜でそれを建てるとしたら——その者にあんたさん、どういった素晴らしい代価を約束なさる。何をそうした者におやんなさるな。おっしゃつてみなされ」。——「おもしろいことを言いおるな、おぬしは」とライン伯爵グラーフは応じて「さようなことができる申すなら、おぬし、その報酬をきつぱりと口にしたすがよい」。——「魂がたった一つでさあ——新しい城ができたなら真つ先にその窓からナーエの谷を見下ろし、それからそんじよそこの溪谷やら山山なんぞを眺めるものの魂をね。——堂堂たる伯爵城グラーフ・シュツルムの値段としちゃあ僅かなもんでござんしょう」。——「今晚もう一度ここへまいれ。余よはとつくり考えてみよう」とライン伯爵は告げ、思案に耽りながらその場を後にした。——自分の念願のために魂を一つ犠牲にするなんて、罪深い冒瀆ぼうとくと思われはしたものの、さはさりながら、欲求は強固で大きかった。城に戻ると彼は城の礼拝堂付き僧侶を呼び寄せ、くだんの取引のことを打ち明けた。坊あまたさんは数多たび十字を切り、断念するよう真剣に諫め、悪しき敵(53)〔悪魔〕の奸計策謀を警戒するよう真心籠めて忠告した。そうしながら頭に被かつた黒いちいぢやな縁なし帽をびよこびよこ動かした。するとライン伯爵グラーフの若い奥方が入つて来て、この話し合いを聴いた。そしてまず坊あまたさんを部屋から出て行かせるなり、こう言った。「例の者の好きなようにおさせあそばせ。欲しがっているものを約束なさるのです。別のが見つかりますわ」と。——そこで騎士は馬で城外に出て、ナーエ河谷に行き、独りきりで巖の裾すそに佇たんだ。もう辺りは暗くなり始めていたが、上の方でなにやら黒い姿が巖から巖へと羚羊かもしかのように跳び移っているの見るや、たちまちかの余所者よそがこれまた下の谷に降り立った。「あんな上で何をしておつた」と騎士。「ちよいと寸法を採つてたんでさ」がかの者の答え。そして訊きくには「さあて、わっちはどうしたらよござんすかね」。騎士はすんでのところで「神の御名みにおいて」と言いつてしま

ところだった——そうしたら何もかもおじゃんになっていたことだろう。で、よく考えて、ただこう言った。「承知した——したが明日の朝までに完成せよ。それから何一つ欠けぬように。主塔、食糧庫、居館、望楼、

囲壁、撥ね橋、堂堂たる城郭に付きものの全てがな」。——翌朝城は旭日に照り映えて焔のように赤赤と輝き、

ナーエ河谷の上に屹立していた。だれもかれもびっくり仰天、こうした驚異と魔法の建造物がこれまでであったためしはなかった。さてライン伯爵が騎馬で上に登ると、夜の建築師がこの新たな素晴らしい財産の中を案内して回

り、幾つもの大広間、広間、撥ね橋、回廊を披露し、それから居館に入ると、絶景を嘆賞させようと一つの丈の高

い弓形窓を開いた。けれども騎士は首を出して外を覗こうとせず、からかい口調でこう言った。「閉めよ。ここは風

が入るわ。我らは登って来たので暖かいが。明日我らはカウツェンブルクを出て、この城山へと引き移る。おぬしはここを明け渡して見張り塔の部屋にでも潜り込むか。なあ」。悪魔はぎゅつと口を歪めた。こやつ、ライン伯爵をこの窓から目眩めくような谷底に突き落とし、その魂を持っておさらばしよう、とおっそろしく楽しみにしていたのだ。

翌朝になると、ライン伯爵と伯爵夫人、城の礼拝堂付き司祭、近侍たち、従者一同、獵師ら、小姓ら、既番たち、番兵たち、獵犬係の若者ども、家禽番ら、城仕えの下女ら、乾酪おばちゃん、女侏儒、それから数数の馬、牝牛、驢馬、獵犬の群れ、尾長猿が一匹と猫どもが到来。さながら族長ノアが方舟に乗り込んだ折の行列みたいなのが、馬に乗ったり、驢馬に乗ったり、車に乗ったりで——皆皆新しい城へと登って来た。

伯爵の若い奥方は礼拝堂付き司祭と愛想良く軽口を叩き、「あそこの高みではさぞかし風通しがいいでしょうね。わたくし、あなたにもっと暖かいお帽子を縫って差し上げますわ。その古い方を見本にちよいと貸してくださらない」などと言って——自分が上に着くと、小姓たちに命じて一頭の仔驢馬を居館に連れて来させ、押さえさせてお

いて、その頭に坊さんの帽子を結び付け、例の窓を開かせると、仔驢馬をそこに立たせた。仔驢馬はいかにももつともらしい仔細しさいありげな様子で窓から頭を突き出し、耳をびくびくやり、新鮮な朝の大気をふんふん嗅かいだ。悪魔はもうとつくから向かいの塔の鋸壁きよへきに坐つて待ち構えていたが、今、窓が開いたのを見、坊さんの馴染なじみのある帽子が突き出されたのを目にすると、さあつと飛んで来て、自分では坊さんと思ひ込んだのをぎゅつと爪つめを立てて引つ張り出し、谷に投げ落とし、その魂を我が物にした。やれまあ、悪魔はなんと怒りまくったことか。エーファの娘むすめの一人にまんまとたぶらかされて、坊さんの魂の代わりに仔驢馬の魂を掴つかまされた、と気づいた時は――。

八〇 長靴一杯の葡萄酒

さて、その後このライン伯爵グラーフが楽しく居住したシュタイン城ではしばしば大賑おおにぎわいとなつた。ある宵のこと、ヴィルト・ウント・ライン伯爵グラーフ一族と大人数の近隣の騎士たちが一堂いっどうに集つて酒盛りに耽ふけり、把手つ付きの大杯べんを回していた。着座していたのはシュボンハイム騎士、トハウン騎士、エーベルンブルク騎士、フレールスハイム騎士、シュトロームベルク騎士などで、痛飲いたんしきりだった。その時つとライン伯爵グラーフが卓上たくじょうに巨大な騎乗用長靴を片方ひらた載せ、これに葡萄酒ぶどうしゅをなみなみと注いで、こう叫んだ。「この大杯べんを一息で空にする者がおれば、牧場から何から一切合切付けてヒュツフェルスハイムを遣はなわすぞ」。これには並み居る面おもて面おもていずれも驚き呆あきれ、一人も敢あえて挑あうとはしなかつた。穩当うんたうに酒を酌しやくみ交まわすなら一廉ひとかどのことができる城の礼拝堂付き僧侶しんりょですらまた然りしかで、少なからずいた他のしたたかな飲み助連も手を出さずじまい。するとやはり一座いざにいたある老上戸じやうじゆ、ヴァルデック騎士ボースは、皆皆の顔を順繰りに眺めて、だれかが長靴を空にしようとするか待つていたが、だれもやらないと看み

取ると、長靴を片手で掴み、葡萄酒を喉に流し込み、すっかり飲み干して爪の吟味までやってのけた。そしていわく「ライン伯爵様、下さったヒュツフェルスハイムの味は上上。今度はヴァルトベーケルハイムではいかがでござろう。なにせ人間、長靴片方では歩けませんまいでな」。——けれどもライン伯爵は騎士の飲み代として村をもう一つくれてやる気なんぞなかったたので、黙りを決め込んだ。その後こんな言い回しが生まれた。「やつは長靴片っぱ丸丸でもへいちゃらだ」〔彼は酒豪である〕。

八一 荒れ狂う獵師

ヴェルト・ウント・ライン伯爵の一人は勇敢な狩人だったが、主の御前のニムロドのようにではなくて、悪魔の前でまさにそうだったのである。来る日も来る日も荒くれたがさつなお伴を引き連れて森の中へとお出ました。仕事日だろうと祝日だろうと伯爵殿には頓着なし、教会には詣でず、坊さんは尊敬せず、狩猟だけが彼の喜びだった。そしてある日曜日の朝、こんなことが起こった。このヴェルト・ウント・ライン伯爵はまたしてもシュタイン城の高みから獵僕たちや獵犬どもから成る同勢とともに谷間に下り、詩人も歌っているように「ホリドーそれからフツサツサ」の喚声を挙げ、耕地だろうと苗床だろうと一切掛け構いなく、地面の若い苗も実った穀物も蹄の下に踏み付けて駆け抜けて行った。間もなく犬どもが大きな白い牡角鹿を駈り出し、その跡をワンワンギャンギャン甲高く吠えながら追い追れば、狩猟喇叭が交響き、数数の獵鞭がびしりびしり、どうどう轟轟どよめいて、ずんずん牡角鹿に随き纏った。辺りの山谷には全て祈禱と莊嚴ミサへと誘う教会の鐘が鳴り渡っていたが、ヴェルト伯爵は皆目耳を貸さずじまい。逃げる牡角鹿はある小百姓の畑へ身を隠そうとした。農夫は狩りの同勢

が自分の畑へと猛進して来るのを見て、跪き、「どうかお情けをもちまして、わしの畑は、わしのたった一枚の畑は勘弁しておくんなさい」と懇願した。——ヴィルト・ウント・ライン伯爵は男を馬蹄に掛けて倒し、狩りの同勢もろとも畑を蹂躪した。逃げる牡角鹿は避難場を求めて草食む畜群に紛れ込んだ。——牧人は荒れ狂う獵師たちが近づくのを見て、自分が預かっている家畜たちのために慈悲を懇願した。——ヴィルト・ウント・ライン伯爵は鞭でびしりとその顔を引つ叩き、「フイー・ハッツ、フイー・ハッツ」と怒鳴った。——すると血に渴いた犬どもは兇暴に咬みついて牧人を引き倒し、牛たちを咬み殺し、それからなおも牡角鹿を追い続けた。牡角鹿はとある森へ遁入、その平穩な日曜日の静けさを今や荒れ狂う獵師たちの一行がけたたましい音を立てて駆逐し去った。

森には隱者の庵室があり、追いまくられて息も絶え絶えの牡角鹿は今度はここへ逃げ込んだ。ヴィルト・ウント・ライン伯爵は同勢とともに庵室目掛けて殺到した。と——庵室の主である雪白の髯を生やした老人は中から姿を現し、片手を上げて戒めた。「近寄るでない」と彼は力強い声音で叫んだ。「ここは神に造られしもの聖域であるぞ」。——「ささまの聖域とやらは地獄にあるは。この老耄れの莫迦犬めが」とヴィルト・ウント・ライン伯爵は庵室の主に向かつていきまき、鞭を高高と振り上げた。しかし振り上げられた右腕はもはや打ち下ろされず——突如辺りは夜となり——庵室の主と小屋、牡角鹿と獵犬ども、獵師たちと勢子の少年たち——これらは悉く消え失せてしまい、ヴィルト・ウント・ライン伯爵の乗馬は喘ぎながらくたくたとくずおれた。そして稲妻一閃、巨大な悪魔の拳が地面から突き出され、荒れ狂う獵師の頸をぐいと捻ったと見るや、雷鳴のごとき声が轟いた。「狩り続けよ、世の終わりまで」。——数多また数多の伝説の語るところによれば、荒れ狂う狩りの一団が時折、天空を駆け抜け、野や森の上を、恐ろしい喚声を挙げながら、犬どものワンワンキャンキャンという吠え声ともども、幻の野獸を駆り立てて行くこととなったのはかくなるしだいである。そして荒れ狂う獵師自身、荒れ狂

う地獄の軍勢に追われているのだ。

八二 シュパンハイムの創設

その昔フィアンデン(註)とラーフェンツィーアブルクのさる伯爵がナーエガウの女伯じよほくに恋をした。女伯は寡婦で、彼女の方も二度目の求婚者である伯爵が嫌いというわけではなかった。——けれども伯爵はある私闘フエトヂで女伯の近い親類の一人を殺したことがあった。こうした縁戚関係のことからしても彼女は、婚姻の縁えいじを取り結びましよう、とそうすぐに受諾はできなかつたし、したくもなかつたので、伯爵の念願成就を、かの私闘沙汰ざたを忘れ去らせるだけの時間を与える条件と連繫させることにした。彼女はフィアンデン伯にこう告げた。「人を殺した罪の償いに聖地へ巡礼行つて下さいませ。そしてかの地から、聖別され、真正と証明された聖なる場所の御徴みしるしを何かわたくしにお持ち帰りを。そういたせばそれでわたくしはあなた様の愛が誠実なこととこれが天の御旨みなことを同時に得心いたしましたしょう」と。——伯爵は故国を出立し、それからまずは一年経つて、そろそろ帰国を考えてもよからう、とあいなつた。彼は不信の輩ともぢらと戦い、聖なる場所の悉ことごとくで祈りを捧げ、誓約を果たすために、真正なることをエルサレム総大司教パトリアルケリスが鉛の封印付き羊皮紙文書もんじよによつて証明している、主しゅの十字架の一部であつた木片シムパンをも入手した。フィアンデン伯はこのように貴重な宝が授かつたので嬉しくてたまらず、数数の寶石を鑲ちりばめたごく精巧な黄金の小箱を作らせ、箱の蓋の上に自分が奉仕する貴婦人の名を黄金地で打ち出し細工とした。それから伯爵は、これで行く幸せを掴つかめる、と希望に胸膨らませて、帰郷の旅に出た。しかし今回は逆運だつた。パレスチナからイタリア沿岸までの長い航海の途次恐ろしい嵐が吹き起こり、船を難破させたので、乗り組みの者たちは身一つ助

かるのがやっとだった。伯爵の持ち物一切合切、それからあの大事な小箱はアドリア海の波浪に呑み込まれた。——哀れやがっくり意気沮喪、憂愁に心閉ざされた物乞いの巡礼として南国(「イタリア」とドイツのもろもろの地域を流浪したあげく、伯爵は再び居城を目にした。そこにはなるほど財貨は充分ありはしたが、失った品の代わりとなる物はなかった。悄然として女伯を訪問すると、あちらは喜んで歓迎してくれた。伯爵は、彼女が以前よりいや増して麗しく、また愛らしい、と思った。それだけに一層辛くてならず、こう口を切ったものである。「女伯様、ご覧の通りそれがしは空手でお目見えにまいりました。それがし、世にも稀なる聖遺物、我らが主の十字架の一部であった木片を、貴重な箱に大切に納めて、そなたのために聖地から持ち帰ったのでござる。嵐が、我らの船を難破させ、それがしの身の回りの品物を悉皆奪ってしまい申した。そなたのものとなる定めで、そなたの御手に絶つてそれがしの幸せを築こう、と存じたあの大事な宝物もまたしかり」。

「おかわいそうな伯爵様」と女伯は言った。その目はきらきらとにこやか、かつ愛しげに伯爵に向けられていた。「そうまでして主の十字架をわたくしに持つて来てくださいましたの。それで、もしかして、あなた様が海の嵐に奪われたその小箱には、わたくしの名が記されてはおりませんこと」。

この言葉を聞いて仰天した伯爵は、夢でも見ているのでは、と思ひ、こう叫んだ。「救世主の十字架にかけて、女伯様、そなたはどうしてそれがお分かりになられた」。

「神の御手、聖人がたの摂理にて」と熱意を籠め、にこやかに女伯は答え、一つの櫃の錠を開け、中から伯爵のあの黄金の箱を取り出し、驚愕する相手の目の前に捧げ持った。「今日の朝方、この城の門を叩く音がいたしました。門衛が開きますと、外に一人の若者が立っております。身には晴れやかな衣装を纏い、曙のように麗しい容貌。『奥方様に』と言って門衛の手にこの宝物を渡します。門衛がこれを眺め、また若者に目を向けると、若者

はもういなくなつておりました。わたくしども、これ以上証が要りましようか。わたくしどもは、さあれかし、と望みました。さあこれからは、お互いに信じ合い、愛し合おうではございませんか。——こう言いながらうら若い寡婦は伯爵の頸つ玉に抱きつき、嬉し涙を流しながら婚約の接吻をした。さて結婚を済ませた二人は、新しい城と修道院を建て、それから村を一つ創設、この村を木片邑シュンパインと命名し、修道院にはかの聖なる木片シュンパインを奉納した。この修道院は木片シュンパインを細かくして豪華に黄金台キンゴウダイに嵌め込んだものを近隣のクロイツナハ修道院にも贈った。さよう、この修道院の古名クルツイナハ、すなわち「十字架に近い」もこのことが起源の由。そして結婚したこの二人の家系は主に祝福され続け、数多の信仰篤くかつ名高い男女が一族に輩出した。彼らは幾つもの修道院を設立、幾つもの教会を建立、聖地で戦つたり、あるいは自身聖なる人として世を送った。

八三 モーゼル葡萄酒の起源の話

古伝説にいわく、あの素晴らしいモーゼル葡萄酒フワインはドイツのフランケン地方が発祥の地である、と。西フランク国王メロヴィヒ(84)がモーゼル地方の居住者一万二千を日出づる方のフランケンに導き、後者からは一万二千の住民をモーゼル地方に移した由。これら東フランク人は上手な葡萄酒フワイン作りだったので、故郷の土地から優良な葡萄酒フワインの木を採つて行つて新しい母国にこれらを植え、そこで葡萄酒の木はみごとに生育し、旨い葡萄酒フワインを今日に至るまで供給し続けて来た。

モーゼル川はドイツのズントガウに位するヴォゲーゼン山地(85)の二つの主要水源から発し、それらの流れはルミルモンの近くで合流、極めて多様に曲がりくねりながらロートリンゲン(86)のフランス語地域を貫流、次

いでドイツのいろいろな地域ガウに、ご機嫌よう、と挨拶し、昔から名高い町町をざわざわと通過して行く。

フランケン葡萄酒フラインについては今日に至るまで「フランケン葡萄酒フライン、病人の葡萄酒クランケンフライン」となる言い回しが一般に用いられている。つまり、この葡萄酒は病人たちにさえ効き目がある、ということ。一方その嫡男、その名声と美質の継承者、モーゼル葡萄酒フラインについてはこんなラテン語の章句が行われている。「ウイヌム・モセラヌム・フイト・オムニ・テンポレ・サウム(87)」、すなわち、「摩澤爾葡萄酒ハ常ニ体ニ良カリケリ」。

八四 聖人たちの墓

モーゼル地方のショー村の近くに聖者エウカリウスに奉獻された礼拝堂がある。聖ザンクトエウカリウスはカタロニア王バキウスとその王妃リエントルデイスの子息だった。ところでこの信仰篤あつき夫妻は聖者エウカリウスばかりではなく、聖者エリギウス、聖女リベリア、聖女ズザナ、聖女メミア、聖女オダおよび聖女ゲルトルデイスにも命を与えたのである。これらの聖人たちは全てこの地域ガウの数多くの貴族たちとともに、背教者ユリアヌス(88)がこの地に導き入れた野蛮なヴァンダル族の群れ(89)に虐殺されたのである。その数たるや二千二百。これが起こったのはキリスト御生誕後三六二年の五月十日のことである。かくして一帯は巨大な墓場と化した。かの礼拝堂はモーゼル河畔、ショー村の向かい側にあつて、敬虔けいけんな殉教者たちの墓となつており、これらの人人の思い出を記念の銘板に刻んで後世に伝えている。

八五 メッツは踊るのお断り

古きメッツは、昔ドイツの都市だったトゥール⁽⁹¹⁾、ヴェルダン⁽⁹²⁾、シュトラースブルク〔「ロストラスブル」同様ドイツからフランスの手に落ちたが、その起源と建設は既にローマ時代以前に遡る。ユリウス・カエサルの軍司令官の一人マリウス・メテイウスは、カエサルに頑強に抵抗したこの町を占領せざるを得ず、壊滅させたが、その後壮麗に再建、自分の名にちなんでメティアと命名し、自身十九年治めもし、十三人の町の長老から成る参事会をも設置、この参事会は長いこと存続した。

皇帝カール五世の時代、フランス王アンリ二世はアンヌ・ド・モンモランシー元帥⁽⁹³⁾をこの帝国直屬都市市外へ送り、もし、たった一個小旗部隊⁽⁹⁴⁾のフランス兵を受け入れるつもりがあるなら、完全保護を約束する、と申し入れた。これは今日では中隊⁽⁹⁵⁾を意味する小部隊と解されるもの。メッツ市参事会がこれに同意すると、三千を下らないフランス兵がこの都市に進駐した。もともと、部隊が掲げたのは小旗⁽⁹⁶⁾がたった一旒⁽⁹⁷⁾だった。彼らは王のために市を無血占領、万全の防備を固め、あらゆる種類の糧食を蓄えた。その翌年カール五世が、メッツをフランス軍から取り返そうと、軍勢を率いて着陣したが、不首尾に終わった。彼は七万の兵を市外に展開、四十日四十夜の間、砲弾は雨霰⁽⁹⁸⁾と降り注ぎ、辺り一面硝煙で絶えず濃霧に包まれたようだったほど激しくこの都市を砲撃させたにも関わらず、雷鳴のごとき砲声はシュトラースブルクにまで聞こえたのだ。メッツの勇敢な防衛者はギーズ公⁽⁹⁹⁾で、彼は皇帝軍に夥しい損害を与えた。かてて加えて飢餓⁽¹⁰⁰⁾と疫病と寒気が更にカール五世の敵に助勢、当時メッツ攻囲軍は三万しか残らなかつた。止めを刺したのはある軍略で、これが皇帝を撤退に追い込んだ。ともあれ長きに亘れば市を守りきることはできまい、ことにその最も弱い方面が攻撃に曝⁽¹⁰¹⁾されているので、と憂慮した公爵は、

王に宛ててこんな内容の書簡を認めた。いわく「攻囲は何ら成果を挙げておらず、何らの危険もありませぬ。ことにカールは最強の防備を施した方面を攻撃いたしおりますゆえ」。この書簡を携えて敵の陣営を抜けるはずの使者は一見へまを演じて捕虜となり、書簡はカールに披露された。カールは実際欺かれて、この書簡の内容を真実と思い、戦力を脆弱な箇所から退かせ、守備の極めて嚴重な別の数箇所を攻撃し、かくして既に獲得していた利点を失った。そして遂に総勢のほとんど半ばを喪失したあと攻囲を断念せざるを得なくなった。こうなると擲擧罵には事欠かない。ドイツ諸邦至るところでカールにこれがたつぷり浴びせられ、マクデブルク攻囲に際しても同様の羽目に陥ると、すぐさまこんな戯れ唄が口から口へと喧伝された。いわく。

小娘一人と下女一人

カールと踊るのお断り。

それやこれやの苦しみがつくづく肝に銘じたカールは三年後統治をすっかり断念、一五八六〔一五五六〕の誤り年修道士としてイスパニアのサン・ユスト修道院に入り、そこで時計の組み立てに励んだ。この同じ年、メッツ、トゥール、ヴェルダン（ドイツ語名ヴィルドウング）がカンブレール講和条約とその締結によって完全にドイツから割讓され、フランス王国の保護下に置かれた。

八六 ヴィルドウングの悪魔との盟約者

ヴィルドウングの町がまだドイツ領だった時——もつとも既にハプスブルク家のルードルフ皇帝(9)の時代ではあったが——同地に一人の市民がいた。彼は貧窮に陥り、そのため進退窮まってなんでもやる気になった。「貧乏人が見栄張ると悪魔がそいつの尻拭い」という諺(10)通り。なにしろこの市民はすこぶる派手好き、贅沢好きだったので。さて彼は新たに宝を手に入れようと、ある老婆の手を借りて悪魔と盟約を結び、神と諸聖人たちからの離反を誓い、子(11)躰し錢(12)の入った孕み巾着(13)を受け取った。この巾着に手をつ突っ込むたびに、片手一杯の金貨ないし銀貨を掏出することができたのである。こうして富を日に日に増やし、幾つもの庭園や家屋、耕地や牧場を購入、毎日栄耀(14)豪華の暮らしをした。ところがある日のこと、家の前の木蔭(15)に坐って、友人たちと酒盛りをしていると、厳めしい顔をした見知らぬ男が二人、黒馬に乗ってやって来た。彼らは馬具を付けた三頭目を伴っており、黒衣を身に纏っていた。男どもは市民の家の前に駒を止め、空鞍(16)の馬に乗れ、と彼に言った。こちらはそれがどういふことになるのか悟って懊惱(17)し、家の者たち、二人の息子、友人らに悄然と別れを告げ、黒馬にまたがると、それに乗って二人の騎者とともに慌ただしく駆け去った。息子たちは、父親が馬に乗ってどこへ二度と帰らぬ旅に出たのか、できれば知りたくてならなかった。そこで例の魔女に金をやって、父親の姿とその居場所を見せてくれないか、と訊くことを思いついた。魔女の老婆は若者たちとある森へ入り、魔法を使って地獄に呼び掛けた。すると大地がさつと開き、市民を連れ去ったあの二人が出て来た。恐ろしい姿だった。すると老婆は若者たちに「おまえがたは父者に(18)も会いたいかの」と訊ねた。——兄の方は恐怖に捉われ、会いたくない、と答えたが、弟はもつと大胆だったので、父親を見せてくれ、と言った。老婆が黒衣の男どもに合図すると、男どもは若者に、随(19)いて来い、と命じた。

しばらくすると一軒の立派な家に着いたが、その一室に父親がいるのを若者は目にした。服装は馬で家から去った時と全く同じ、様子もほとんど同じだった。ただ、顔には名状し難い苦悩の表情を浮かべていた。「父上、いかがですか」と若者は訊ねた。「お元気ですか、お辛いですか」。——父親は吐息をついて言った。「倅や、わしは世俗の富のために神とわしへの神のご配慮を捨て、肉体も靈魂も悪魔にやってしもうた。おまえたち二人ともわしから相続した財産は処分してしまえ。なぜなら、それを遣うとおまえたちはひどい目に遭い、わしが蒙っているのと同じ苦しみに委ねられるからだ」。——「苦しめられているのですか、父上。でも、ほくには焔のようなものは何も見えませんが」と息子が問う。——「倅や、おまえの小指の先でわしに触れてみい。だが、素早く引っ込めるのだぞ」と父親が答えた。言われた通り若者は電光が閃くほどの早さでさつと父親に触れた。そのとたんその指と手と肘までの腕に火傷を負い、この上もない灼熱の苦痛を感じた。震え上がった息子は叫んだ。「おお、かわいそうな、かわいそうな父上。あなたのためにぼくらは何か助けになることができなのですか」。——「何もできぬ、永劫にな」と父親。「あの地獄の財宝をおまえたちが捨てる他は」。そこで若者が嘆き悲しみながら父親に暇乞いをする、例の男どもが魔女の許に連れ戻した。若者は、だれでも見たがる者があれば、火傷した腕を見せてやり、父から相続した財産の一切を兄とともにある修道院に寄進した。修道院はそれを喜んで受け取ったが、決して不祥事は起こらなかった。ところで兄弟は修道士となり、父親が劫火の責め苦から救済されるよう祈って生涯を終わらした。

八七 貞女フロレンティーナ

メッツに高貴な騎士がいて、名をアレクサンダーといった。彼にはまことに徳高き奥方がおり、名をフロレンティーナといった。騎士はある贖罪のため聖墓に詣でるといふ誓いを立てた。すると妻は彼に新しい襦袢を一枚こしらえて、それに赤い十字の印を付け、「いつもこれをお召しになつてくださいませね」と言った。「これはそのような力を授かつておりますし、浄められておりますので、いついつまでも汚れることはありません。これはあなたが帰還あそばすまで守るつもりでおりますわたくしの純潔と貞節の徴なのです」と。ところでメッツの騎士アレクサンダーは聖地で虜囚の身に落ち、他の者たちとともに奴隸として犁を牽かされ、さながら牡牛のごとく鞭打ちと鞭を耐え忍ばねばならなくなった。けれどもその襦袢は、苛酷な労働、それから埃と汗と血にも関わらず、いつもいつも清らかで雪のように真つ白だった。奴隸監視人たちはこれには小頸を傾げ、王に披露した。王が、奴隸の襦袢にいかなる事情があるのか、と問い質しに掛かると、アレクサンダーは妻フロレンティーナの貞節と純潔の物語をした。根も葉もないまやかし咄であるう、と考えた王だが、この世で人の身にそうしたことが起り得るものか、知りたくて堪らなくなり、費用を出して腹心の者を急使として西洋の地に送り出した。急使は恙なくメッツに到着、奥方を捜し当て、殿は辛い虜囚暮らしをしておられますよ、と物語った。それからことに、奥方がすこぶる麗人だ、と思つたので、手管の限りを尽くしてその気を惹いた。しかし奥方にどう取り入ろうと努めでも全く徒労だったから、引き下がって、主人にフロレンティーナの変わることなき貞節さを言上することにした。一方奥方は男の巡礼に身を簀し、自らがいとも巧みに弾きこなせる堅琴を携え、例の異教徒を追つて旅し、ヴェネツィアで追いつくと、正体を見抜かれずに彼と同行して異教徒の国へ赴いた。さて兩人が異教徒の王の宮廷

に参着すると、かの使者はメッツでの使命の結果を報告、それから旅の道連れの精妙な堅琴の演奏を褒めそやした。そこで巡礼は宮中に召され、演奏を許され、演奏の報酬として莫大な賜物を下し置かれた。けれども巡礼はこれを受け取ることを拒み、ただ、犁に繋がれている奴隷たちの一人を自由にしていただきたい、と願った。それが認められると、フロレンティーナは奴隷たちのところに行き、彼らの中から夫を捜し出して放免してもらった。しかし自分がだれか知らせようとしなかった。陸路でも船路でも教えぬまま、男の変装で押し通し、夫とともに故郷を目指した。メッツまでまだ二日の旅路を残すとなった時、フロレンティーナはこう告げた。「旅の道連れさん、もはや我らはお別れです。あなたを自由の身にして差し上げた代りに、どうかわたしにも何か想い出のよすがとなる物をください」。——「何をくれとおっしゃる。無一物同然のこのそれがしに」と解放された騎士は訊いた。「あなたは珍しい襯衣を着ておいでだ。その奇蹟の話をわたしは異教徒の国で耳にしました。それを少し切ってください。そうすればわたしは巡礼の先手でその奇蹟を唄や話で他の人たちに聴かせてやれます」。——「他ならぬあなたがそう言われるのだし、それがしはあなたに大層なご厚恩を蒙っておりますゆえそういたします。余人であれば、我が妻の純潔と徳行とのかくも素晴らしい証であるこの襯衣をお頒けしたりはいたさぬところですが」と騎士は答え、そんなに大きくはないが、襯衣から一片を切り取り、感謝しながら巡礼に渡した。フロレンティーナは夫に先んじてメッツへとどんどん急ぎ、元通り婦人の衣装を纏い、丸一日遅れて夫が帰り着くと、心からの喜びようで夫を愛しがったので、騎士はすこぶる幸せになった。ところが帰還した騎士がそれからだんだん友人たちと再会するようになると、彼らの奇妙な素振りに気づかされた。自分に対して心中何か隠しているのだ。そしてとうとう一人がこう言った。「みどもは不思議でならぬ。貴公がご妻女とここで出逢えたことがな。ご妻女は貴公の帰着を感じていたに違いない。見知らぬ男がちよくちよく、それも長いことご妻女の許におって、あげくの果て、ご妻

女はそやつ跡を追っていなくなり、十二箇月と申すもの不在であった。そして貴公の帰る僅か前に戻って来たのでござるよ」。——そこで騎士はかんかん腹を立て、友人親戚一同を宴席に招き、客たちの前で妻に問い質した。なにゆえかくも恥知らずに長い間家をよそにしていたのか、流浪の乙女の流儀よろしくいったいどこをほつき歩いていたのか、と。——すると貞女フロレンティーナは黙って食卓から立ち上がり、隣室に入ると、豎琴を携えた男の巡礼姿となつて戻つて来た。そして襦衣から切り取つた亜麻布の一片を夫に差し出した。そこで騎士は両手を挙げて叫んだ。「赦してくれい、天女のそなた。純潔なそなた。奴隷の桎梏から、犁の軛から解放してくれたそなた」。そして泣きながら奥方の頸つ玉に縋りつき、許しを懇願した。そこで一切の糾弾はそれきり永遠に鳴りを潜めた。

八八 トリーアの齡

トリーアとゾロトゥルンとはヨーロッパ最古の都市の由。古い歌謡の教数に歌われたように、キリストご生誕前千と三百年の昔トリーアは既に存在した。それどころかトリーアはその上の世界で第二の大都市だった。第一はローマである。そして古人はこれを最も豊かなトリーア、至幸のトリーア、最も誉むべき、卓抜なるトリーアと呼んだ。——しかもローマ時代既にこうだったのだ。ドイツ中世の時代にはトリーアはキリスト教搖籃の地であり、第二のローマ、ドイツのローマだった。トリーアの早咲きの文化の華はまずガリア人の三度に亘る蹂躪によつて破壊され、この都市は巨大な墓場と化した。それにも関わらず、こうした破壊を免れた少数の貴族階級は、ローマの最も深甚な風紀頹廢の時代、この世界都市で行われていた闘技場での血みどろの演目を要求したのだ。ところ

で、かつて占星術師たちはトリリアーア一帯を惑星プラネーテンガッセの裏町と呼んだ。⁽¹⁸⁾この辺りではおそろしく頻繁に雨が降るそうなので。この地方のある湖にもこんなことが伝えられている。ここには時折不思議な魚が姿を現すそうだが、そうした現象はその時のこの地の領邦君主の死去を予告するのだとか。古き昔の夥しい記念的建造物のうち最も美しいのはトリリアーア大聖堂である。大聖堂内には長いこと一本の角が陳列されていた。住民はこれを悪魔の鉤爪かぎづめと称し、このように伝えている。大聖堂を建築した棟梁とくりやうは独りではできなかったので、悪魔に助けを頼み、それからうまく騙だまくらかした。そこで悪魔は怒り心頭に発して祭壇まつりだんをぶち壊そうとしたが、しくじって、祭壇に鉤爪を一つ残さねばならなかった、と。トリリアーア大聖堂には、主キリストが纏まとっていて——とても美しかったので切り分けたくなかったから——兵卒どもがそれを骰子博奕さいごうばくちの賭物かけものとした、といわれる縫い目のない聖衣が奉安されている。これは薄い亜麻生地あまなの、細糸で多色に織られている長袖の男物の上衣うわぎである。この上衣を聖なる十字架の一片およびキリストを十字架に付けた釘の一本とともにトリリアーアへ贈ったのは聖女ヘレナで、彼女はここへ敬虔けいけんな司教アンテイオキアのアグリティウスを遣わしたのである。この上衣はその真正なることを疑わない何百万もの信徒のこの上なく深甚な尊崇を受けている。多くの場所に同様の上衣が存在していて、これこそ本物、と証明されているわけではないが。

八九 聖ザンクトアルヌルフの指環

トリリアーアでもとりわけ歳古りているのはモーゼル橋フリッッケンである。なんと法外、世の常ならぬ大きさの石造建築で、いずれにせよローマ時代の造営になる。既にかの皇帝ネロがケルンに至る全ての地方を征服するためこの橋を

渡つて出征した由。橋の迫持アライチが連結している場所ごとに列柱があり、これらは橋の胸壁のずつと上まで聳そびえ立っている。以前はその先端には異教の神神の立像が飾られていた、とのことである。かつて聖者アルヌルフが良心の呵責を感じ、たまたまモーゼル橋ブリックゲを渡つていたので、川の深みを見下ろし、高価な指環ゆびわを指から外し、「我が罪が許されるものと考えてよろしければ、この指環をまた取り戻せますように」と叫びながら、それを神の全能と慈悲ゆたに委ねきつてモーゼルの流れに投げ込んだ。数年ならずして聖者アルヌルフはメッツの司教になった。ある日のこと一人の漁師が司教館の厨房ちゆうぼうに大魚を一匹持つて来た。料理番がそれを主人の食膳しょくぜんのために調理していると、なんともびつくりしたことに、魚の内臓の中に見事な指環を発見したので、それを司教の許もとに差し出した。司教はそれが自分の物だと分かった。どうやら例の魚がこれを食べ物だと思い、落ちて来た時呑み込んで、そのまま体内とどに留めておいたのである。——聖者アルヌルフはこうした恩寵しよんの徴しるしを目の当たりにして謙虚に神を誉め讃え、邪念をことごとく棄て去り、恩寵に相応あきあしくふるまつた。

九〇 天罰てんばん 靦面

一六七三年フランス軍がトリエアを攻囲した折、彼らはこの都市周辺の修道院を悉く破壊し尽くした。人人は軍司令官に対し、このような不埒ふちちを働かないよう哀訴嘆願の限りを尽くし、神の家（「教会」）や神聖な僧院に瀆神とくしんの所業をなす者の末路はろくなことはあるまい、と仄めかした。しかし軍司令官いわく「これはわしには関わりのないこと。かくあれかし、と思し召して、命令なさった国王陛下の問題だて。今夕までこの修道院が灰の山にならんければ、悪魔がわしをひつ攫さらうがいい」。司令官は丁度ある橋の上に留とどまっていたのだが、こう言った途端、乗

馬が突然跳ね、橋の胸壁を跳び越えるなり、乗り手もろともモーゼル川に転落した。川中で、乗り手は下に、馬は上に、と折り重なり、人馬ともども頸をへし折った。

この司令官の後任もやはりここへ馬で来た。哨兵が警告して声を掛けた。「ここは馬に乗ったまんまだと安全とは申せません。敵はこの地点に照準を合わせとります」。——「あはあ」と司令官は笑った。「敵さん、おれの尻を撃ちおろがよかるう」。——この瞬間稜堡の上から銃声が轟き、司令官は一声高く絶叫すると、馬もろともにくずおれた。弾丸はまさに彼が口走った通りの箇所^{りょうほ}に命中、そこに留まらずに飛び出して、馬の頸を貫通したのである。

訳注

- (1) ダルムシュタット Darmstadt. ヘッセン州南部の都市。ライン河右岸を河と平行して走る重要な交易路だった山街道はここが出发点だった。それがこの都市の繁栄の要因でもあったが、三十年戦争の間は軍隊の通り道となり、荒廢に繋がった。
- (2) マルター Mäler. ドイツ、スイスの昔の穀物量ないし木材量の単位。地方によって異なり、穀物量の場合一五〇—七〇〇リットル。
- (3) ヘッセン・アルプス Hessen-Albus. 「アルプス」〔＝「白」〕は一三六〇年以降ドイツ西部で行われた銀貨。ヘッセン・アルプスは一八四一年までヘッセン大公領で通用。
- (4) 癩な百 das böse Hundert. 「厭わしい百」。
- (5) お茶会 Kränzchen. 婦人たちが定期的に開く小さな集い。
- (6) 城扶持 Burglehen. 「ブルクレーエン」は通常「城の封土」の意。封建制度の下、王侯が配下の貴族に与えた領地を扶持であり、貴族はその代償として一定の兵力を王侯に提供した。もともとこの物語の場合、ダルムシュタット市とフランケンシュタイン一族との間に封建的主従関係があったわけではないが。
- (7) マインツ Mainz. 紀元一世紀後半ローマ人が軍事拠点として築いた「モゴンティアークム」を起源とするこの都市は、十世紀に興

- 隆、オットー朝からシユタウフェン朝の神聖ローマ皇帝時代に黄金時代を享受し、「黄金ノもぐんていあ」Aurea Moguntia (＝黄金のメインツ」Goldenes Mainz) と呼ばれた。
- (8) ヴィンフリート・ボニファティウス Winfrid Bonifatius。綴りは他²⁾Wynfrith, Wynfrith, Wyrfrid, Wyrfrith Bonifatius。宗教改革以降カトリック教会から「ドイツ人の使徒」Apostel der Deutschen と呼ばれる。六七二／六七三年、遅くとも六七五年に南西イングランドのウエセックス小王国に生まれ、七五四／七五五年フリースラントで没する。最も著名な布教者の一人。ゲルマニアへの布教大司教兼教皇遣外使節であり、最後にはメインツ大司教、ユトレヒト司教管区管理者となった。
- (9) ドイツで最も重要なもの der bedeutendste in Deutschland。ドイツの大司教座の中で首位。
- (10) 木の聖杯を用いし und bedienten sich hölzerner Kelche。本稿底本では、und bedienten sich goldner Kelche。(黄金の聖杯を用いし)となっていて、明らかに誤りである。現行の版に従う。そうでないとは対比の妙が失われる。
- (11) ハットー Hatto。ハットー二世(九七〇没)。九五六―六八年フルダの大修道院長。その後亡くなるまでメインツ大司教。
- (12) 彼は……伯を斬首させた。Er war es, ... denselben enthaupten ließ。DS四六八はこの顛末を詳しく語っている。
- (13) エトナ山 des Aetna。エトナ Etna (火) 山はイタリア南部シチリア島東部にあるヨーロッパ最大の活火山。現在の標高は三三二〇余メートル。ほとんど常に噴火している。
- (14) 鼠の塔 Mäuseturm。「水城」Wasserburgとは周囲を水濠で囲まれている城塞だが、これは十四世紀後半ライン河の島に建てられた防禦と監視のための塔で、その任務はライン河を上下する船舶からの通行税徴収(DS九三に登場するプファルツグラーフェンシユタイン城の小型版である)。それゆえ「通行税Maut塔」と呼ばれていたのが、民間語源説Volksetymologieで「鼠の塔」に転訛したものの。
- (15) ポーゼン Posen。ポーランド名「ポズナン」「ポズナニ」Poznań。ポーランド西部にあるポーランド最古の都市の一つ。十八世紀後半から第一次世界大戦終了時までプロイセン王国領。
- (16) 聖ヨハネス St. Johannes。「洗礼者ヨハネス」であろう。イエスにヨルダン川で洗礼を授けたヨハネはユダヤの荒地野で説教をし、蝗と野蜜を食ふ物としていたから、ワインとも全く無縁だったはず。
- (17) お毒味役の酌人 Mundschenk。封建領主の場合、最も信頼される近侍がこれに任命される。王侯や大貴族のそのの場合「献酌侍従」くらいが適当か。DSB五四注参照。
- (18) 嘘の父 der Vater der Lügen。「悪魔の王」の父。
- (19) どんな席でそのほうは食事をいたしたか An welchem Ort hast du gegessen? 封建領主の宴席では、一段高い壇上の食卓で主人

- (20) 側と貴賓が食事し、壇の近くではそれに次ぐ人人が、壇から遠ざかるに従って順次下位の者たちが食事と与る。
曝し柱 Schandpfahl. 木または石でできた中世の刑罰用の柱で、町の中心の広場に設けられ、比較的罪の軽い罪人はここに括り付けられて、見せしめのため一定期間衆目に曝された。
- (21) 堅信礼を受けようとする子どもたち die Zahl junger Katechumenen. 直訳「公教要理を学ぶ若者の人数」。「堅信礼」「堅信の秘蹟 Konfirmation」とは、幼児受洗など既に洗礼を受けている者が、伝道士や聖職者から公教要理を学んで更にキリスト教徒として強められ、信仰告白を行う儀式。カトリック教では秘蹟の一つ。
- (22) 死者は歩いた Tote wandeln. 「賽者は歩いた Lahme wandeln」の方が自然とは思いますが、原文のまま。
- (23) 聖遺物 Reliquien. カトリック教会はキリストや諸聖人ゆかりの品を尊んで保管していることが多い、あるいは中世には多かった。たとえば、キリスト磔刑の折の十字架の破片、茨の冠の一部、その衣（トリリア大聖堂にはそう伝えられる品がある。DSB 八八参照）などなど、諸聖人の遺骸の全てあるいは一部など。
- (24) 自由ドイツ都市 die freie deutsche Stadt. 中世に大幅な自治権を得て神聖ローマ帝国直属となった都市。周辺の王侯・高位聖職者の封建支配下になら、とごう意味で「自由」である。
- (25) フランクフルト Frankfurt. フランクフルト・アム・マイン Frankfurt am Main. ライン河の大きな支流マイン川の下流に位置するドイツ中西部の大都市（住民数六十九万余）。ドイツの経済、金融、交通の中心である。古来から要衝の地で、ローマ軍の駐屯地から発展。ローマ軍の撤退後アレマン族が占拠したが、五三〇年頃フランク族がマイン下流域支配権をアレマン族から奪取した。フランク族は現在、古橋が架かっている場所のいくらか上流にある徒歩で渡れる浅瀬を交通路として用いたようだ。
- (26) 渉り場 Furt. 徒歩で渡れる浅瀬。
- (27) ルートヴィヒ王 König Ludwig. カール大帝の第三子で大帝の死後唯一生存していた男子。そこで父の領有していた大帝国を単独相続した。カロリング朝フランク王国第三代国王ルートヴィヒ一世（在位八一四―一四〇）・西ローマ皇帝（在位八一四―一四〇）。ルートヴィヒ敬虔王・帝 Ludwig der Fromme（＝ルイ敬虔王・帝 Louis le Pieux）と呼ばれる。
- (28) カール禿頭王 Karl der Kahle. カロリング朝西フランク王国初代国王シャルル禿頭王 Charles le Chauve（在位八二二―七七）。シャルル二世。西フランク王国の後身がほぼ現在のフランス。
- (29) ルートヴィヒドイツ人王 Ludwig der Deutsche. カロリング朝東フランク王国初代国王ルートヴィヒ二世（在位八四三―七六）。ドイツ人王なる添え名がある。東フランク王国の後身がほぼ現在のドイツ。
- (30) Hemma 「Emma」Emma とも。シュッセンガウ伯ヴェルフの息女。

- (31) ルートヴィヒの子息カール Ludwigs Sohn, Karl. 東フランク王カール三世（在位八八二—八八七）・西ローマ皇帝（在位八八一—八八八）。後に西フランク王（在位八八四—八八八）をも兼ねた。父ルートヴィヒドイツ人王の遺領東フランク王国を兄のカールマン Karlmann —— 東フランク王（在位八七六—八八〇）・イタリア王（八七七—七九九）——とともに分割相続（フランク族の慣わし）したが、カールマンその他係累の死亡により最後にはフランク王国全土を継承するに至った。しかし、内憂外患を抑える資質に欠け、また病氣（癩癩ではないか、と思われる）に悩まされ、甥（カールマンの子息）ケルンテン辺境伯アルヌルフが八八七年十一月に叛乱を起こすと、対抗策を講じぬまま逃亡、叛乱勃発の二箇月後、八八八年一月に死亡した。カール肥満王・帝 Karl der Dicke（＝シャルル肥満王・帝 Charles le Gros）と諱名された。
- (32) ドイツ王国の王冠 des deutschen Reiches Krone. もとよりこの頃はまだ「ドイツ」は存在しない。いわばその前身の「東フランク王国の王位」の意だが。
- (33) 密猟者 Wildlieb. 中世、王侯貴族など、領土の所有地に棲息する鹿、猪を始めとする野獣野鳥の捕獲は厳しく禁じられ、違反者は死刑に処された。近世英国の地主保有地における兎、山鳥などの密猟でさえ流刑その他の嚴罰が科された。狩猟は領主およびその配下の獵師の特権だったわけである。ここでは市有森林での密猟が問題になっているが、やはり死刑で禁じられていたと見える。
- (34) エッセンハイム塔 Eschenheimer Thurm. 中世後期のフランクフルト市防禦堡壘の門で、市の象徴。現在は交通繁華な広場に面していて、エッセンハイム門と呼ばれている。高さ四七メートル。かつて九つの穴が開けられた鉄の風見がついていた。
- (35) 自由都市の der freien Stadt. DSB六七注参照。
- (36) 吹き曝しの絞首台 der lichte Galgen. かつての「リヒト」licht（普通「明るさ」の意）とて形容詞は「絞首台」Galgenには付かない。Lutz Röhrich: *Lexikon der sprachwörtlichen Redensarten*. Abte. Herder, Freiburg i. Br. 1973.によれば「もしかすると、絞首台が通常町から離れた丘の上に設けられたことと由来するのかも知れない」とのこと。そこで「吹めて曝し」と訳語を当てる。
- (37) 雄鶏はさかすかのさかすかに啼かせん da krähle kein Hahn nach ihm. 「そのさかすかに雄鶏は啼かなさ」Da(es)kräht kein Hahn(da)nach. は「さかすかにだれも気に懸けな」という意の慣用語。
- (38) 狩詞 Waidmannssprichlein. 獵師仲間に使われる慣用語。
- (39) 九つ当たり der Neuner. 九柱戯で九本の柱全部を倒す投球。
- (40) 彼が仄めかしたのは……黄金鍔金の雄鶏のこと er meinte ……den überglühenden Hahn …… DSB一八六に詳しく。
- (41) 地中の小人 Erdmännchen. 小人 Zwergにはさかすかの呼称があるが、これもその一つ。丘や山の内側、つまり地中に棲んで

- (42) 金銀を始めとする金属鉱石や宝石を掘り出し、前者を精錬して巧みな工芸品を作り出す鍛冶と金属加工の伎倆わざに優れている。丈が低く、醜みにくいが、恐ろしく力が強い。概して人間には無愛想だが、時折親切になることもある。DSB一〇注をも参照。
- 角笛を嘯うそと吹き鳴らした *liß sein Horn erschallen*. 騎士を初め身分ある者がどこかの城を訪れる際には、城門前で角笛を吹鳴して開門の挨拶を申し入れる。
- (43) 盾持ち *Knappe*. 騎士見習いの貴族の若者。騎士に扈從たごして身の回りの世話をし、かつその武器を管理する。戦闘ではともに闘うことも。屈強な平民がなる場合もある。従士。
- (44) 特命使節 *Waldbote*. *Waltbote* と綴るのが普通。高級官吏で、地方によっては伯爵に次ぐ身分であったり、上級裁判所の首席裁判官を務めたりしたようだ。詳しくは識者のご教示を俟つ。
- (45) この囊の中に別の皇帝を用意いたしておるわ *so hab' ich schon einen andern Kaiser in der Tasche*. ドイツ王の選定は選帝侯アウグスタたちが行ったが、この中でマインツ大司教、ケルン大司教、トリアー大司教、ライン宮中マウ伯の賛成は絶対必要であり、その中でもマインツ大司教が最も重要な存在だった。ドイツ王は神聖ローマ帝国の事実上の君主だったので、ローマで皇帝として戴冠アウグスタ式を挙げなくても「神聖ローマ皇帝」と自ら唱えたから、「選帝侯」との邦訳は間違ではない。この四人の他ザクセン公、ブランデンブルク辺境伯の二人計六人、一二八九年以降はボヘミア王が加わって計七人の聖俗ドイツ大諸侯が一八〇六年の「ドイツ国民の神聖ローマ帝国」*das Heilige Römische Reich deutscher Nation* 解体まで選帝侯アウグスタだった。
- (46) アードルフ伯爵 *Graf Adolph*. ナッサウ伯アードルフ。ドイツ王・ローマ王（在位一二九二―一九八）に選出されるが、対立王アルブレヒト・フォン・ハプスブルクと戦って敗死。
- (47) ヴィースバーデン *Wiesbaden*. ヘッセン州の州都。州内ではフランクフルト・アム・マインに次ぐ第二の都市。
- (48) 科の木 *Linde*. DSB一注参照。
- (49) 疫病 *ein Sterben*. 黒死病。とりわけ十四世紀ヨーロッパでは三回の大流行と教数の小流行があり、一三四七年十月シチリア島に始まった大流行の場合、一応終熄するまでヨーロッパの人口の半ばが死んだ、とされる。
- (50) 死神のように蒼ざめた *Bleich wie der Tod*. DSB一注参照。
- (51) リューデスハイム産の古酒の力を借りて *durch alten Rütsteinmer*. リューデスハイムはドイツ有数の白ワインの産地。なお、中近世ヨーロッパの有産階級には蜜のようにとろりと甘い白ワインが好まれ、人によってはそれを大杯であおったりした。古代ギリシア人のように節度正しく水で割ったりはしなかったようだ。
- (52) 旅館ガストハウス *Gasthaus*. 酒と食事を提供するのが本業だが、客を泊める部屋も幾つか用意してある店。地域の人人が寄り合う場所でも

- ある。ガストホーフ Gashof 云々。
- (53) 臨終の秘蹟 *Sterbesacramente* 終油礼。カトリック教会の七つの秘蹟の一つ。司教、あるいは司祭が病者の傍らで祈り、聖書を朗読した後、病者にオリヴ油を塗り（悪霊を追い出す呪いが起源か）、聖体拝受と祝福で終わる。かつては臨終間近の人に行われたので標記の名称があったが、今日では（一九七二年以降）「病者の塗油」と改められた。これでもうおれはまたしても救われぬまま、何百年か待たなくてはならぬ *Nun bin ich wieder unerlöst auf aber hundert Jahre!* カマーベルク城の廢墟に呪封されている（おそらくかつての城主ななしの一族の）靈魂は、厳しい条件が満たされて、ようやく救済されるのである。たとえば城跡に何かの若木が芽吹いて、成長して、巨木になったそれが伐採されて揺り籠が作られ、その揺り籠で育った子どもが成長してから、口を利くことなしに、櫃の蓋を開き、宝を我が物にすれば、といった条件。これだと、次の機会は何百年か後となろう。DSB 五八参照。
- (54) 小祈祷 *Seuzerlein* 神に捧げられる、ごく短い祈祷。
韻文短祈祷 *Reimgeliehn* 旧約聖書詩編などから採った韻文の祈祷で短いもの。
その一つは宝の有り場所を知らせてくれたもの *deren eine einen Schatz angezeigt*。DS 一二四に詳し。
今一つは、町を砲撃しようとする敵軍を阻止したといふもの *die andere den Feind abgehalten, eine Stadt zu beschleßen*。DS 一二五に詳し。
- (55) 居館 *Palas* DSB 九注参照。
ライン伯爵 *Rheingraf* ライン伯爵は本来ラインガウ（ライン右岸、現ヘッセン州南西端、マインツ盆地の西の部分）を領有していた極めに古い伯爵家の名。クロイツナハ近郊のライングラーフェンシュタイン城とともにライン左岸の地域をも代代相続。一七八〇年マインツ選帝侯（マインツ大司教）に敗れてラインガウを失い、ライン左岸地域のみを支配。嗣子の絶えたヴェルト伯爵家と一四〇九年婚姻によって結び付き、ヴェルト・ウント・ライン伯爵家の系譜が誕生した。一四七五年オーバー・ザルム伯爵家の遺領をも相続し、以降ザルム伯爵家（後、侯爵家）となる。
- (61) カウツェンブルク *Kauzenburg* 現ラインラント＝プファルツ州バート・クロイツナハ郡バート・クロイツナハにある山城。
(62) 城の礼拝堂付き僧侶 *Burgfräule* 城専属の司祭で、城の礼拝堂を取り仕切り、城の住人の宗教面の面倒を見る。カプラーン *Kaplan*。
(63) ちいぢ々な縁なし帽 *Käppchen* 頭蓋だけを覆う縁なし帽。頭部の真ん中を剃髪しているカトリックの僧侶や、頭髪の薄くなった年輩の学者や薬剤師などが被った。従ってこれを被ると、しつかつめらしい感じになる。

- (64) 神の御名において In Gottes Namen. 異存のないことを示す返辞。「お好きなように」「ご随意に」。
- (65) 主塔 Bergfried. 中世ドイツの城郭の中核となる巨大で要害堅固な塔。周囲が侵攻されても最後まで抗戦できるような構造の軍事拠点で、その屋上は城で最も高く、見晴らしが利いた。英仏の、とりわけノルマン式城郭の本丸 donjon に相当。
- (66) 居館 Pals. DS B 九注参照。城郭の内、領主がその家族とともに住む場所と定める居心地の良い一画。ここでなら領主は窓から外を眺めるに違いない。
- (67) 望楼 Lugins Land. Luginsland とも。十五・十六世紀上部ドイツにおける城郭内見張り塔に対する戲称。直訳「世間覗き」。弓形窓を開いた Öffnete Bogenfenster. 光が入るようにガラスや角の薄片を嵌めた窓があったわけではない。悪魔が開いたのは木製の鏡戸である。
- (69) 見張り塔の部屋 ein Zimmer im Wächerturme. 城の外壁に設けられた見張り塔の、哨兵が休息したり眠ったりする部屋。粗末で寒い。
- (70) 乾酪おぼちやん Käsemutter. 王侯貴族の城や邸宅でチーズ、バター、クリームなど乳製品製造に当たる酪乳婦に対する戲称。
- (71) 女侏儒 Zwerghin. 小人(侏儒) 症を呈する疾患などによる顕著な低身長を中世ヨーロッパの王侯貴族が召し抱えていることは少なくなかった。
- (72) エーファの娘 Tochter Evas. イヴの娘、すなわち、女性のこと。
- (73) 巨大な騎乗用長靴を片方 einen mächtigen Reiterstiefel. 十四世紀末から十五世紀全般のドイツの騎乗用高長靴は太腿の半ばにまで達するものだった。
- (74) 爪の吟味 Nagelprobe. 乾杯の折主人役などがやって見せたしきたりで、飲み干した杯を左親指の爪の上に傾け、一滴残らず飲んだ証拠とするテスト。
- (75) やつは長靴片っぱ丸丸でもへいちゃらだ der verträgt einen guten Stiefel. 「長靴片方(丸丸、たごぶり)でも平気である」 einen (guten, tüchtigen) Stiefel vertragen (können) は「大量のアルコールに耐えることができる」の意の慣用句。
- (76) 荒れ狂い狼師 Der wilde Jäger. DS B 一三注参照。
- (77) 主の御前のニムロドの息子 wie Nimrod vor dem Herrn. 旧約聖書創世記十章によれば、ニムロドはノアの息子ハムの息子クシュの息子で、「主の御前び勇敢な狩人」 ein gewaltiger Jäger vor dem Herrn であり、同章九節には「ニムロドのように主の御前で勇敢な狩人だ」 Das ist gewaltiger Jäger vor dem Herrn wie Nimrod. という言い回しがある、と記されている。
- (78) ホリドーそれからフッサッサ Horrido und Hussassa. 「ホリドー」は今日まで用いられている、ドイツではだれにでも知られた狩

- (80)(79) 狒の掛け声。狩狒の際ばかりでなく、宴会の乾杯の文句ともなっている。たとえば「悪魔と馬での狩り万歳。ホリドー・ヨーホー、ホリドー・ヨーホー、ホリドー・ヨーホー、フッサッサ」は人口に膾炙している。
- フーイ・ハッツ、フーイ・ハッツ *hui hazl hui hazl* 犬を使う狩狒での駆り立ての掛け声。「やれ、やれい」。
- 隠者の庵室 *Einsiedlerkause*。中世ヨーロッパのカトリックの宗教者には、修道院で共同生活をしながら厳格な宗規に従い修業に励む修道士たち(必ずしもその全てが聖職に叙品されたわけではない)、教区の教会を預かってその教区の人人の司牧に当たる司祭、あるいは大聖堂で聖務を行うさまざまな位階の僧侶の他に、司祭に叙品されている者——そうでない者もいたが——が、特定の組織に属さず独り静謐のうちに神に近づこうと、人里離れたところに粗末な小屋を設けて隠棲し、ひたすら祈りに身を捧げている場合もあった。これが隠者、隠遁者である。周辺の善男善女、もしくは特定のパトロンが生活必需品を喜捨した。一所不住の托鉢僧については殊更言及しない。
- (81) 聖域 *Asyl* フランス語の「アジール」*asile*。ここでは「域外権力の及ばない宗教的避難場所」の意。中世ヨーロッパにおいては教会や修道院に庇護を求めた者は私刑や復讐を受けることなく一定期間滞在できた。
- (82) フィアンデン *Vanden*。ヴィアンデンとも。現ルクセンブルク北東部の小邑。ドイツとの国境近く、ウール川の畔にある。一八七一年亡命中のヴィクトル・ユゴーはこの町に滞在。この町を見下ろす古城は有名かつ壮麗で、ユゴー滞在中は廃墟だったが、彼もこれに言及している。
- (83) エルサレム総大司教 *der Patriarch von Jerusalem*。十字軍の侵攻により東方教会の総主教座を駆逐する形でエルサレムに置かれたラテン・エルサレム総大司教座の首長。
- (84) 西フランク国王メロヴィヒ *Merowig*、*der Westfrankenking*。Merowig、あるいは Merowech、とも綴る。フランク族がローマ領ガリアの地で勢力を拡張し始めた時代の首長の一人。トゥルネーの王(在位四四七—五八)。ローマ軍にも参加、戦功があった。メロヴィング朝の祖。
- (85) ドイツのズントガウに位する *im deutschen Sundgau*。ズントガウは現フランス東端地域の地理的名称。かつては主として神聖ローマ帝国、すなわちドイツ勢力圏に属していた。この名はアレマン・ドイツ語で「南の地域」の意。
- (87)(86) ヴォゲゼン山地 *Vogesengebirge*。D Sa 11三注参照。
- ウイヌム・モセラヌム・フィート・オムニ・テンボレ・サウム *Vinum Mosellanum fuit omni tempore sanum*。この後には次の一行が続く。Vinum Rhenense decus et gloria mense。いわく「萊茵葡萄酒ハ食卓ヲ飾リ昂揚サセルナリ」。
- (88) 背教者ユリアヌス *Julianus Apostata*。綽名「アポスタター、アポスタート」。これは、背教者、棄教者、すなわち、キリスト教会

- (89) からの離反者のこと。ローマ帝国皇帝フラウイウス・クラウデイウス・ユリアヌス(在位三六一—六三三)。キリスト教を公認したコンスタンティヌス大帝の甥。新プラトン主義に傾倒、ギリシア古典に精通していた哲人・文人皇帝だが、軍司令官としても有能だった。即位後公然とキリスト教を批判し、異教文化復興を試みた。ササン朝ペルシアとの戦いで戦傷死。後世、背教者と誇られた。ヴァンダル族の群れ Vandalenherden。ヴァンダル族は五世紀初頭ヨーロッパ中央部へ侵攻を開始した発祥不明の民族。五世紀半ば北アフリカにヴァンダル王国を建設。この王国は五三四年東ローマ帝国の名将ベリサリウスに敗れ、滅亡した。ヴァンダル族は「兇暴な文化の破壊者」の意ともなる。
- (90) 古きメッツ *das alte Metz*。フランス北東部ロレーヌ地域(今メッツ)の首邑メス。三〇〇〇年の歴史を有する。神聖ローマ帝国直属都市の一つだったが、一五五二年フランス王国の支配下に入り、三十年戦争(一六一—一八四)終結時ヴェストファリア条約(一六四八)により、トゥール、ヴェルダンとともにフランス領なることが承認される。シュトラースブルク(「ロストラスブル」)がフランス領となったのは一六九七年(DSB三四注参照)。
- (91) トゥール *Toul*。フランス北東部ロレーヌ地域(今メッツ)の都市トゥール *Toul*。神聖ローマ帝国直属の自由都市だったが、一五五二年フランス王国の支配下に入り、ヴェストファリア条約によりフランス領なることが承認される。
- (92) ヴェルダン *Verdun*。ヴェルダン(今メッツ)スル(今メッツ)ムーズ *Verdun sur Meuse*。フランス北東部ロレーヌ地域(今メッツ)の都市。ローマ時代ガリア人によってムーズ河畔に建設されたウエロドゥヌム(ラテン語で「強い砦」の意)が起源。初代神聖ローマ皇帝オットー一世(在位九六二—七三)の時代からドイツ領。メッツ、トゥールとともに三司教領を形成。一五五二年フランス王国の支配下に入る。要塞都市として古くから有名。
- (93) 皇帝カール五世 *Kaiser Karl V*。神聖ローマ皇帝カール五世(在位一五一九—一五六)・イスパニア国王カルロス一世(在位一五一六—一五六)。ハプスブルク家。その領土はイタリアの長靴の踵から新世界の太平洋沿岸まで広がり、日の没することはない、と言われた。フランス語が母語。貴顕の公用語がフランス語だったフランドルのヘント(ゲント、ガン)で生まれ、育った一であり、パリを愛したが、フランス王家とは生涯対峙した。一五五六年自ら退位。イスパニア王位は子息フェリペ(二世)が、神聖ローマ皇帝位は弟フェルディナント(一世)が継承し、イスパニア西部エストレマドゥーラのクアコス・デ・ユステなるサン・ヘロニモ・デ・ユステ修道院に隠棲、ほぼ九二年後、一五五八年逝去。
- (94) フランス王アンリ二世 *König Heinrich II. von Frankreich*。ヴァロワ朝第十代のフランス王(在位一五四七—一五九)。フランソワ一世の次男。メデイチ家から嫁いだカトリクス・ド・メデイシスの夫。
- (95) アンヌ・ド・モンモランシー元帥 *Connétable Annas Montmorency*。フランス元帥アンヌ・ド・モンモランシー(一四九二—

- (156-17) Anne de Montmorency, Connétable de France。ヴァロワ朝のフランス軍人。フランソワ一世、アンリ二世、フランソワ二世、シャルル九世らに仕え、とりわけアンリ二世亡き後、その寡婦カトリーヌ・ド・メディシスの信頼篤く、王権を支えた。
- (96) 小旗部隊 *Fähnlein*。十六—十七世紀において、傭兵隊長が指揮する連隊を構成する一〇—一六個の部隊で、兵士四〇〇(三〇〇—六〇〇)との説明もある)から成る。因みに旧日本軍の歩兵一個中隊(平時は九個中隊=三個大隊、戦時は一二個中隊=三個大隊で一個連隊)の兵員数は平時一〇〇、戦時二五〇。
- (97) ギーズ公 *Herzog von Guise*。第二代ギーズ公フランソワ・ド・ロレーヌ(一五一九—一六三三) *François de Lorraine, duc de Guise*。フランス王国最大の勇将の一人。一五五二年神聖ローマ皇帝カール五世のメッツ(「メス」)攻囲戦で防衛に成功、一五五八年には二百年以上に亘り英国の支配下に置かれていた英国のフランスにおける最後の拠点カレーをも奪還した。フランス国内の宗教戦争ではカトリック勢力の首領。危機感を深めた新教徒側の刺客に襲撃されて重傷を負い、これが原因で死去。
- (98) カンブレ講和条約とその締結 *Vertrag und Friedensschluß zu Cambry*。一五二九年、フランス国王フランソワ一世との間に結ばれたこの条約の結果、カール五世は北イタリアにおける権益を確保し、ネーデルラント十七州をハプスブルク家の所有とした。しかしながらこの条約は、メッツ、トゥール、ヴェルダンのフランスへの割譲云云とは無関係。
- (99) ハプスブルク家のルードルフ皇帝 *Kaiser Rudolph von Habsburg*。神聖ローマ皇帝ルードルフ *Rudolf* 二世(在位一五七六—一六一二)。ハンガリア王(在位一五七二—一六〇八)、ローマ王(在位一五七五—一五七六)、ボヘミア王(在位一五七五—一六一二)。神聖ローマ皇帝マクシミリアン二世の子息。新教に反感を示した父と異なり徹底したカトリック教徒で、新教徒弾圧政策を採り、帝国内の大反発を招来、三十年戦争(一六一八—一四八)の遠因を作った。政治的に無能ではあったが、文人としては優れており、彼がウィーンから引き移って帝国首都としたプラーク(プラハ)は文化的に繁栄した。彼の治世下ではヴェルダンは既にフランス王国に支配されている。
- (100) 子解し錢の入った孕み巾着 *Heckebeutel mit Brutfennigen*。子玉を産んで増やしてくれる魔法の錢「子解し錢」*Brutfennig* に関する民間信仰は古く、全ヨーロッパに広まっています。Heck (e) taker, Heck (e) plennig, Heck (e) groschen, 玉。金運を招く「縁起錢」「種錢」として特定の貨幣を財布に入れておく慣わしもこうした俗信と類縁か。決して中身の尽きることはない財布という道具は十六世紀初頭に刊行された民衆本『フォルトゥナートゥス』で有名。
- (101) 流浪の乙女の流儀よろしく *nach fahrender Fräulein Art*。アヒム・フォン・アルニム/クレメンス・プレントナーノ編者のドイツ民謡集「少年の魔法の角笛」(一八〇六—一八) *Des Knaben Wunderhorn* に「流浪の乙女」*Das fahrende Fräulein* がある。この箇所はこうした民謡を踏まえてのペヒシュタイン一流の加筆である。

- (102) トリーア *Triar*: ラインラント・プファルツ州の古都でドイツの西端に位する。モーゼル河畔にある。ケルト人とゲルマン人の混血民族トレウエリー族にちなんで「アウゲスタ・トレウエロルム」と命名されたローマの植民都市が起源。建設は紀元前一六一前一三年。ローマのガリア・ゲルマニア辺境への進出拠点であり、交通の要衝であることから、三―四世紀には人口七万を数え、アルプス以北最大の都市だった。ローマ帝国からここに導入された葡萄栽培およびワイン醸造技術がドイツ白ワインを誕生させた。すなわちトリーアはモーゼル・ワイン発祥の地である。ローマ帝国の遺跡群(円形競技場、公衆浴場である皇帝浴場・バルバ浴場、ローマ橋、黒門など)でも有名。
- (103) ゴロトゥルン *Solothurn*: スイスの古い都市。アーレ河畔にある。紀元一四―三七年頃建設されたローマの要塞都市サロドゥルムが起源。DSB六に名のみ出る。
- (104) 闘技場での血みどろの演目 *blutige Circusspiele*: 円形競技場で行われた剣闘士など奴隷の職業戦士によって演じられた流血の試合を指している。
- (105) ところで、かつて占星術師たちはトリーア一帯を惑星の裏町と呼んだ *Die Astrologen nannten übrigens das "Trier'sche Gebiet" die Planetengasse*: 中世ドイツの都市の裏町では路上からろくろく空が見えなかった。それゆえ、雨が多いせいで日月星辰の観察がし難いトリーア地方をこう呼んだものか。
- (106) 兵卒どもがそれを骰子博奕の賭物とした *um den die Kriegsknechte gewürfelt*: キリストの磔刑執行はローマ帝国ユダヤ属州総督ポンテオ・ピラト(ポンティウス・ピラトゥス)が派遣したローマ兵たちが行った。かつては死刑囚の最後の持ち物は死刑執行人の所有となるのが慣例。この話では、磔に架けられるまでキリストが纏っていた衣が切り分けるのが惜しい品なので、だれが丸丸取るか、骰子で決めた、とされている。新約聖書ヨハネ伝十九章二十三節には、四人のローマ兵が衣(「上衣」)を取って四つに分けたが、縫い目のない一枚織りの下衣(「二股の下穿きの上に腰巻き状に纏ったものか」)は籤引きとした、とある。
- (107) 聖女ヘレナ *die heilige Helena*: フラウイア・ヘレナ(二五〇頃―三二九)。交易都市ビュザンティオン(後のコンスタンティノポリス)の旅籠屋の下女、給仕女だった、と言われる(諸説あり)。優美な乙女だった彼女は身分の高いイリア人将校コンスタンティヌス・クロルスに見初められ、その妻となり、息子を産む。やがて夫が政略結婚を余儀なくされ、ヘレナを離別せざるを得なくなるなど、彼女にとって不遇な時期が長かったが、分裂していたローマ帝国を再統一して単独の皇帝(コンスタンティヌス大帝)となった息子は、老齢の母を宮廷に迎え、皇妃の称号を賦与する。ヘレナは三二三年頃キリスト教に改宗。七十八歳の折、エルサレムに巡礼を行い、キリストの墓に詣でる。翌年死去。
- (108) モーゼル橋 *Moselbrücke*: モーゼル川に架かる石造の橋。普通、ローマ橋と呼ばれ、紀元二世紀の建築。

結びに一言。

第一・二号合併号掲載の拙稿の結びにも記しましたように、これは年来親しくして戴いた古橋さんへの 臚はなむけの真似事です。本来なら「試訳（その一）」の方がおめでたいのですが、本誌「古橋信孝教授記念号」はなにせ第三号、順序を逆にはできませんしね。尤も当方の最初の目論見では、分載試訳の一篇などではなく、十三世紀フランスの韻文リテラチュアラテン語諷刺滑稽譚サチにもあり、『千夜一夜物語』の幾つかの話の小さい枠物語（バートン版第二十四夜―第三十四夜）ともなっている、転転と動かされる死体を扱った民話（AT/ATU一五三七「五回殺された死体」The Corpse Killed Five Times.）を、初代三遊亭圓朝口演の芝居噺「兩夜の引窓ひまど」、桂米朝復元の上方落語「算段の平兵衛」、明末の馮夢龍編『醒世恒言』（「三言二拍」の一つ）収録の白話小説「一文錢小隙造奇冤」（一文錢が僅かな隙に世にも不思議な冤罪造る）邦訳無し）などにも触れつつ、比較口承文芸論の論文に纏めたものを古橋さんにお目もじさせたかたのですが、ドイツ語参考文献（Walther Suhr: *Der Schwank von der viermal getöteten Leiche in der Literatur des Abend- und Morgenlandes: Literaturgeschichtlich-volkskundliche Untersuchung*, Halle a. S. 1922）がふつしても手に入らず、これを欠いては論文は組み立てられまい、と今回は見送らざるを得ませんでした。